針葉樹会報

第 151 号
2022 年 11 月

目次

【私の思い出の一葉】……岡田　健志　2

■山行記録

天狗岳で春山を楽しむ……小西　大　3

憧れの秘峰笊ヶ岳に登る……佐藤　活朗　4

残雪の針ノ木岳（懇親山行）……兵藤　元史　7

灼熱の大無間山は意外に涼しく……谷津　範之　9

越後の名山を訪ねて（弥彦山、米山）
―ミニ越後シリーズ―……竹中　彰　11

大天井岳日帰り……大矢　和樹　16

『日本人とエベレスト』を読んで……佐藤　周一　18

一橋山岳部　部歌　山讃賦（さんさんぶ）……松崎　武雄　24

「山讃賦」創部百年統一歌詞について……加藤　博行　24

会務報告……26

学生の活動記録……36

編集後記……40

表紙写真＝槍ヶ岳（大天井岳から）　2022年7月2日
（本文16頁参照）　撮影・大矢　和樹

発行日　2022 年 11 月 4 日
発行者　針 葉 樹 会
（会長　前神直樹）
印刷所　ヤマノ印刷㈱

針葉樹会報
第 151 号

編集人　岡田　健志
〒248-0022
鎌倉市常盤 937-53
会報幹事／岡田健志、藤本敏行

一橋山岳会ホームページ　http://huhac.com/

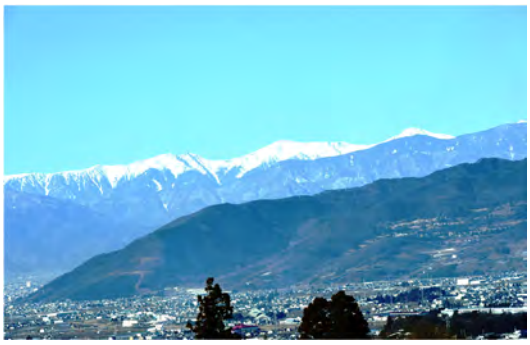
私の思い出の一葉

時々の北岳

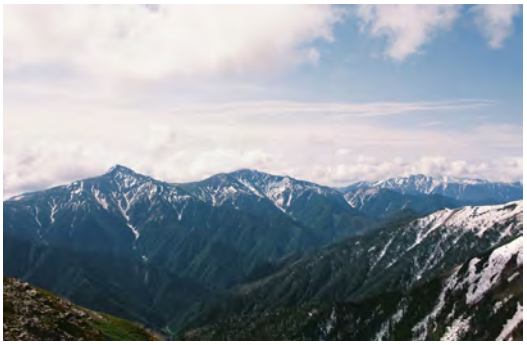
岡田 健志（1967 年卒）

９月２９日から北岳に挑戦する。創部１００周年の記念登山だ。

一橋山岳部にとって北岳は、特別な存在だと思う。北岳には、これまでにも何回も登ってきた。時々に撮った写真を探し出して並べてみた。



2022.2.9　白根三山（中央本線車窓から）



2013.6.7　白根三山（仙丈ヶ岳から）

1971.1　バットレス

1966.3　中白根山付近から

2018.9.24　広河原から

山行記録

天狗岳で春山を楽しむ

小西　大
（昭62（1987）年卒）

【日　程】 2022年3月24日～25日
【参加者】 前神直樹（1976年卒）、佐藤周一（1979年卒）、小西大（1987年卒）
【行　程】 1日目：茅野駅～渋御殿湯
2日目：渋御殿湯～黒百合ヒュッテ～中山峠～東天狗岳～中山峠～黒百合ヒュッテ～渋御殿湯～茅野駅

【山行記録】

山行当日は6時半前に出発。渋御殿湯から黒百合ヒュッテまでは、北八ヶ岳らしいコメツガやシラビソの樹林帯が続く2時間強の行程だ。この辺りは大きな岩がゴロゴロ転がっていてやや歩きにくかったと記憶しているが、十分積雪したルートはしっかり踏み固められており歩きやすい。黒百合ヒュッテでアイゼンを装着、5分ほどで中山峠、さらに南に進むとほどなく樹林帯を抜けて真っ白な稜線に出る。

ここからは眼前にそびえる天狗岳（実は山頂手前の偽ピーク）を目指して先行者のトレースを辿る。前日、前々日に降った雪の稜線歩きは快適だ。ただ雪山経験の浅い自分（小西）には、急斜面を登るたびに復路の心配が頭をよぎる。下山してきた先行者から山頂手前で撤退してきたと聞くと緊張感が高まる。前を歩く前神さんに「ここなら落ちても止まる」と言われても、「ここは落ちるかも知れない」と翻訳してしまい恐怖が増幅されるだけだった。しかし、一旦覚悟を決めると冷静にスタスタ歩けるのには我ながら驚いた。

2022.3.25　東天狗岳（左）と西天狗岳（黒百合ヒュッテより）
撮影：小西大

急斜面をひょいひょい登っていく前神さんの背中をなんとか追っていくと、黒百合平から1時間強で山頂に到着。南側には爆裂火口の硫黄岳、最高峰の赤岳に阿弥陀岳、その背後には南アルプス。振り返ると蓼科山をはじめとするたおやかな北八ヶ岳の山々。中央アルプス、北アルプス、上信越方面の山々まで

2022.3.25　東天狗岳頂上にて
（左から佐藤（周）、小西、前神）　撮影：小西大

見渡すことができた。
山頂には30分ほど滞在。美しい眺望にすっかり弛緩してしまったが、気を引き締めて下山。往路よりも下山の方が緊張するはずだが、慣れてきたせいか、アイゼンで雪面をしっかり捉えながら意識的に歩くのが気持ちよかった。
晴天率の高い八ヶ岳だが、今年の3月は天気が不安定だった。しかし山行当日は好天に恵まれ穏やかな絶好の山日和だった。このような日に登ることができたのは佐藤（周）さんのおかげである。荒天の間隙を縫って絶妙な日程調整をして下さった佐藤さんには感謝の言葉もない。平日のため登山者も少なく静かで気持ちよかった。ちなみに、収容人数１００人の渋御殿湯に宿泊したのは我々だけだった。
一面の青空と白銀の世界。雪山の閑寂で抑制的な魅力を満喫した登山だった。同行していただいた前神さんと佐藤さんに、改めて感謝申し上げます。

【自己紹介】

２０２２年1月開催の針葉樹会臨時総会で特別会員に加えていただいた山岳部顧問の小西です。この場をお借りして簡単に自己紹介をさせていただきます。

まずは、針葉樹会会員に加えて下さったことに感謝申し上げます。「サバイバル登山」で知られる服部文祥氏は「二足歩行できるところは散歩」と言いますが、その意味では自分は全く散歩の域を出ない山登り初心者であり恐縮しております。
私は１９８７年商学部卒、その後大学院商学研究科に進学、１９８９年にウェスタン・オンタリオ大学（カナダ）に留学しました。１９９４年の学位（経済学）取得後は東京経済大学、２０００年からは一橋大学に勤め、金融制度・コーポレートファイナンスに関する研究・教育に携わっています。現在は山梨県上野原市在住で、休みの日には犬（最近は家内も）と一緒に八重山、権現山、扇山など近隣の低山を歩いています。カヤックも好きで、日の出前に西湖や本栖湖に出かけて山を眺めながら湖上で朝食をとり、気が向くとカヤック撤収後に雪頭ヶ岳や竜ヶ岳など周辺の山に登ります。全くの素人ですが写真を撮るのも好きで、昨年は紅葉の涸沢に行き、ついでに北穂高に登ってきました。遊ぶのは結構得意です。
２０２０年に山岳部生からの依頼で顧問になりました。大学のガイドラインにより顧問不在ではコロナ禍で部活動ができないため、急遽引き受けることになった次第です。役不足ではありますが、現役の山岳部生、ＯＢのみなさんと大学の橋渡しができればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

憧れの秘峰笠ヶ岳に登る

佐藤　活朗
（昭53（１９７８）年卒）

【日　程】２０２２年5月4日～5日
【参加者】前神直樹、谷津範之、佐藤活朗

長期化するコロナ下、大きい・遠い山から遠ざかり、近場の日帰りハイキングという自粛モードに慣れてしまった反面、どこか満たされないものが溜まってきたような気もする。そんな折前神さんから谷津さんと笠ヶ岳に登る計画があると告げられた。谷津氏は１９８１年インドで遭難した三君と同期で、三人とも２０１９年のバラシグリ氷河追悼行に参加した仲間である。笠ヶ岳は昔、深田久弥氏の著書で知って以来気になっていた。深田氏は確か望月達夫先輩とともに保川ルート（現在は廃道）を辿り、あまりの遠さ、寒さに

登頂を断念したが、その挑戦心が記憶に残っていた。渡りに船とすぐ参加を申し込んだ。

今回は保川の一つ南の奥沢谷を詰め、尾根を辿って布引山２５８４ｍに達し、最後に主稜線を２６２９ｍの頂上に向かう最近のルートを取った（近年静岡県側の椹島から新ルートが開かれたが、こちらもアプローチや行程はかなり長い）。登山口の老平集落（４８０ｍ）→頂上間の高度差は２１５０ｍもある。富士山や南北アルプスの高峰ではバスや車で行ける登山口から頂上まで１３００～１６００ｍ程度なので、これは相当大変だろうと思った（高度差日本一かも？）。少なくとも山中一泊が必要になるが、途中いっさい小屋はない。しかも、これほどの高さなのに麓から頂上は見えず、かなり登ってやっと望見できる。まさに秘峰と呼ぶにふさわしい。

５月４日　晴

三名は前夜山中湖のわが山荘に泊まった。連休前半は雨が続いたが、後半は安定して晴れが続く予報で、朝５時、心も軽く車で山中湖を出発した。本栖湖トンネル経由約２時間で新緑が美しい老平集落に着き、７時10分林道の車止めゲートから歩き出す。30分ほどで林道が尽き、深い谷の左岸高いところに水平につけられた小道を辿る。登山口に警告看板があったとおり崩落が激しく、途中でいくつか急峻な沢に架けてあった鉄の橋が落ちていたり、危うい崖上を通過したりという具合で、いきなり緊張を強いられた。登山者が少なく、地元では維持管理が行き届かないのだろう。帰宅後に調べたところ、奥沢谷の右俣奥に、甲斐地方の山間部で昭和30年頃まで？掘っていた多くの金鉱山の一つがあったようだ。この水平道も鉱山用に開削されたものらしく、ところどころに石垣や岩壁を削った跡が残っている。

水平道を２時間で奥沢谷が二股に分かれる「広河原」に着く。事前情報では橋はなく渡渉するとされていたが、たまたま引っかかっていた太い流木を利用し、足を濡らさずにわたることができた。ここが最後の水場で、今夜の泊まり場には残雪は無さそうなので、昨晩の打ち合わせ通り各自二日分４Ｌの水を荷に加える。

９時半広河原を出発、「山の神」の祠１２２０ｍまで、最近持ち慣れぬ重荷と壁のごとき急登に喘ぐ。その後「四本檜」１６１０ｍあたりまで来ると、左右にケーブルやウインチ、ドラム缶といった、鉱山関連らしい資材が散乱している。この辺からやや傾斜は緩んできたものの、ひたすら登りは続く。ただ、周囲は次第に気持ちの良い針葉樹の森となり、南アルプスに帰ってきたという気分に慰められる。

遍路完歩や北関東の山を歩き回ったりしている二人は快調なペースで登る。自分は背中の荷が重く感じられ、付いていくのがだんだん苦しくなってくる。適当なところで泊まってしまいたい。でも、明日の行程を考えるとできるだけ登っておきたい…。

2022.5.4　奥沢谷広河原にて（谷津）　撮影：佐藤活朗

少し平な肩になっている「檜横手」２０２１ｍについたが、森の中は木や凸凹があって４人用テントを張るスペースが見当たらない。ずるずると休み休み登り続け、午後３時２３５０ｍあたりで狭いスペースを見つけ、なんとか前神氏の新調テントを張った。

このあたりからようやく笊ヶ岳のピーク（手前のぽっこりした「小笊」でそれとわかる）が望める。今日は下山してくる数組と行き合ったが、連休にしては登山者が異様に少ない感じがするし、二組は登頂を断念したとのこと。やはり一般向きの山ではないということか。

二人から私が持参を断念したアルコールが提供されて恐縮。数字にこだわるわけではないが、今日８時間で約１８７０ｍ登れたことが素直に嬉しく、日が長くなった夕刻を楽しんだ。なお、今回の食事は軽量化のため各自すべて乾燥食品としたが、味は昔とは別物くらいに改善しているうえに、水や燃料も少量で済むので正解だった。快適な気温で汗をあまりかかなかったこともあり、結果的に持ち上げた水はかなり余った。

５月５日　晴

４時50分テント地を出発。昨日の疲労はかなり回復したように感じ、軽荷なので快調。５時30分布引山２５８４ｍ。手前の崩壊地から、今回初めて雪をまとった聖岳が正面に見えた。主稜線はところどころ残雪の上を辿るが、森の中で危険はなく持参したアイゼンは使わなかった。いったん２４１０ｍ鞍部まで下りて最後の登り、７時快晴の笊ヶ岳頂上着。

頂上はかなり雪が残り、雪を整地してテントを張った跡がある。昨日出会った転付峠から縦走してきたという単独の男性はここに泊まったらしい。頂上はわずかに森林限界を抜けているため、北岳から最南部までの南アルプスの峰々や富士山などが遮るものなく目に入る、久しぶりの頂上での会心のひととき。

明るいうちに登山口に戻るため早々に下りにかかる。布引山で今朝２時に登山口を出て日帰りの途中という50代とおぼしき超元気な単独の男性に出会う。９時半テントに戻り撤収、出発。足腰の疲れが出て広河原まで急下降が実に辛い。途中で早くも頂上から下りてきた男性に抜かれる。広河原に戻ったときはほっとした（13時）。気の抜けない水平道を慎重に辿り、登山口に帰着（15時）。車で下る途中にある七面山登山口の温泉に寄り、行きと同じ道を戻り河口湖駅で二人を降ろし解散した（17時半）。

内心もう登る機会は無いかもしれないと思っていた憧れの秘峰に、今回お二人のおかげで登ることができ、長いコロナ下で溜まった鬱屈もかなり晴らすことができたように思う。

2022.5.5　笊が岳頂上にて　谷津（左）と前神
バックは左から上河内岳、聖岳、赤石岳　撮影：佐藤活朗

残雪の針ノ木岳（懇親山行）

兵　藤　元　史
（山行幹事　昭52（1977）年卒）

【日　程】 ２０２２年６月３～５日

【参加者】 小西、山崎両特別会員、中村（雅）、前神、佐藤（活）、兵藤
学生は岩崎主将以下17人

６月３日　曇時々雨

活朗さん、兵藤は10時半過ぎに大沢小屋着。テント場・水場チェック、雪渓への偵察など行っているうちに小西さん11時半、学生先発隊の５人が12時過ぎに到着。幸い、すべてのテントが雪上ではなくギリギリ土の上に張れた。学生がテントを張り始めたら雷雨となったが、１時間ほどで止んだので、雪上訓練に出発。

元々残雪期のＯＢ懇親山行の積りが、会長兼学生幹事の前神さんの強い勧めにより、学生もジョインしたもの。多数の新人たちが参加してくれた。

小屋から５分ほどで雪渓にでて、基本的な注意は活朗さんがやってくれた。ちょっと上った右岸に安全な場所を見つけて、登・下降の歩行訓練を２時間ほど実施。靴の底が柔らかい部員が多くて苦労していた。中村さんは16時過ぎに到着。学生さんがおいしいキムチ鍋を作ってくれたが、小雨が降っていて分散の食事となったのは残念だった。

テント泊初めての学生はどんな夢をみたのだろうか？

６月４日　晴れ

頂上を目指す中村さん、小西さん、活朗さん、岩崎の４人は５時半に出発。夜行バスで来る後発隊（学生12人）、前神さん、山崎さんを二度寝しながら待つうち、８時過ぎに到着。アイゼン・ピッケル等装備の確認（本来は下界にて済ませておくべき）をしてから９時訓練に出発。

昨日の場所にて歩行訓練後、滑落停止訓練の場所を探しながら登り、途中でアイゼン装着。マヤクボ沢出合の少し下、左岸にザイルを張って安全確保してから、11時過ぎに前神さんの年季の入ったデモンストレーションから訓練開始。

ピッケルの本数が足りないなど、あまり効率的な訓練にならなかった。また学生は皆、本日下山とのことで、１時過ぎに下降開始となり時間的にも十分な訓練とは成り得なかった。マヤクボ沢経由の登頂隊は剱岳などの景色を堪能して、無事12時前に合流。雪渓を離れる前には全員で記念撮影を行った。

2022.6.4　針ノ木雪渓での雪上訓練　撮影：小西大

学生、小西さんが下りた後は、ＯＢ５人で宴会。ビールに酒に、そして連夜のキムチ鍋にて楽しい歓談のひと時を持った。一升瓶を

2022.6.4　雪上訓練を終えて　撮影：小西大

2022.6.3　サンカヨウ　撮影：小西大

2022.6.4　左から小西、佐藤（活）、岩崎、中村（雅）（マヤクボのコルにて、バックは立山連峰、剱岳、黒部湖）　撮影：小西大

担ぎ上げてくれた山崎さん、ビールと鍋材料はいつもの前神さん、どうもありがとうございました。モンベルの６人天はダンロップのそれとの比較で広くて、快適だった。

６月５日　小雨のち（晴れたはず）

天気予報は雨とのことで、早々に下山の準備をする。雨具をつけてテント撤収中、なんと山田（２００３年卒）が姿を現す。我々が今日も上に行くのだと思っていたらしい。「一緒に行きましょうよ、一人は寂しいし」と言いつつ撤収を手伝ってくれた。雨の予報だし、学生は下りてしまったしで、こちらはもちろん即下山。

扇沢に着いたのは何時だったか？多分８時前かな、その頃から再び晴れ始めていた。当初梅雨入りは３日との予報がでていて心配していた天気だったが、結局梅雨入りは６日となって本山行は完全セーフだった！

尚、小西さん、山崎さんの写真、動画がＨＰに掲載されていますので、そちらもご覧ください。

〈以下は登頂隊４人の一言感想〉

岩崎：ＯＢの中村様、佐藤（活）様、そして小西先生とご一緒して楽しい時間を過ごさせてもらいました。山頂から望む北アルプスの山々は絶景で、残り少ない大学生活で一座でも多くその頂に登りたいと感じ入りました。

雪渓訓練に参加した新入部員らもよい経験ができたと語ってくれました。コロナ禍で縮小傾向にあった活動再興の良い機会になったと思います。準備や訓練に関わってくださったＯＢの皆様方には改めて感謝申し上げます。

小西：初日の雪上訓練、二日目の登山のどちらも、これまでにない楽しい経験になりました。山頂直下のコルで足がつってしまいピークを踏めなかったのは心残りですが、いずれリベンジします。次の機会には是非懇親会にも参加したいと思います。同行された大先輩の中村さん、佐藤（活）さん、主将の岩﨑君、ありがとうございました。兵藤さんをはじめ、参加された皆様に感謝いたします。

活朗：年齢幅半世紀余のパーティーにもかかわらずあまり違和感は覚えず、とにかく岩﨑リーダー・中村先輩の後をついていったら頂上に着いていました。マヤクボのコルで待機された小西顧問の決断にも敬意を表します。

快晴の頂上では見渡す多くの山々それぞれの思い出や、20年前に故近藤と二人でここからスキー滑降した記憶などが交錯して胸が一杯になりました。

中村：今回は嬉しいことが三つありました。①大学４年の夏合宿の縦走の出だしで針ノ木岳に登りました。実に55年振りに再訪できて感慨深かったです。②４日は朝から雲一つない快晴に恵まれました。ヤマクボのコルから見た立山、劔の展望は見事でした。山頂では絶景３６０度の大パノラマに大満足しました。55年前の山頂はガスと雨でしたので、山の神様の恵みに感謝！ ③トップを元気一杯に登った岩崎主将が時々立ち止まって私を待ってくれました。敬老精神に感謝。佐藤(活)さんの適切なリーダーシップにも助けられました。

雪渓登りは今回が最後と思っていましたが、80歳までは出来るかなと希望が持てたのは嬉しいです。異色のパーティでの楽しい登山、有難うございました。

灼熱の大無間山は意外に涼しく

谷津　範之
（昭58（１９８３）年卒）

【日　程】 ２０２２年７月１日～２日
【参加者】 前神直樹、佐藤活朗、谷津範之

５月に笠ヶ岳に登頂した後、次に登りたいのは大無間山と前神さんが言う。私自身は魅力を感じていなかったが、笠ヶ岳が楽しかったこともあり、同じメンバーで７月初め梅雨の中休みを狙って行きましょうということになった。

ところが関東は６月27日に梅雨明けしてしまう。私のいる栃木県足利市は連日40℃近くの猛暑である。こんな中で、行程が長く森林限界以下で頂上も見晴らしが利かない、多分風も通らないような鈍くさい山に登るなんて、熱中症にかかりに行くようなもの。何とかお二人の再考を促そうと、行動時間が16時間40分になる計画書を作成し送ってみたり（私の高校山岳部ＯＢ会の実績からだとこうなる）、持って行く水の量は４リットルだと

言ってみたり、盛んに牽制を投げるのだが全く通じず、当日を迎えることとなった。

7月1日（金） 16時前に静岡駅で集合、佐藤活朗さんの車で登山口へ向かう。登山口は畑薙ダム手前の明神橋だ。以前は井川湖北の田代からのルートが一般的だったが、現在は崩落が進み危険になっている。代わりに明神橋から小無間山に登る北側の尾根が良く登られている。

18時半、登山口向かいの路肩にテントを張り、椅子とテーブルを出し、活朗さんが用意してくれた焼肉、ビール、焼酎で夕食。直ぐに寝る。標高が８００ｍを越えているせいか、意外に涼しく、熟睡。活朗さんは暑いためテントの外で寝る。顎の所をヒルに噛まれ、翌日は血を流しながら登っていた。

7月2日（土） 3時起床、4時出発。ヘッドランプをつけて登りだす。道路わきの擁壁に付いた梯子を上り、右手の沢をトラバースすると急登の九十九折れとなり、山肌を登っていく。高圧鉄塔補修のためのルートで、登山靴より地下足袋で歩いたほうがよい道だ。スリップすると下まで落ちそうで緊張する。いきなりのハードコースに、この先大丈夫かと不安になる。

5時45分、主稜線にでる。ここからは随分歩きやすくなる。陽が上がってくるが、意外に涼しい。風も良く通る。快適な登りで9時、小無間山着。ここからはアップダウンは少ないが、距離が長い。10時、関之沢の頭（中無間山）、11時10分大無間山。16時間の計画よりは1時間半早く、昭文社のコースタイムからは25分遅れである。帰りも長いので、写真を撮ると下山にかかる。

2022.7.2　大無間山にて（谷津、佐藤（活）、前神）

13時30分、小無間山。ここからの下りはかなり急である。登ってくるときは気が付かなかった。今日は取りつきが非常に急だったため、その後の登りが楽に感じたのかもしれない。慎重に下るため、スピードは上がらない。水は一人３Ｌ持ってきて、最後の５００ミリになっている。

16時55分、明神橋着。昭文社のタイムよりは25分遅れ。休憩時間を考慮すればかなり良いペースではなかろうか。近くの赤石温泉白樺荘泊。夕食19時でお願いしていたが、温泉に入って18時半からゆっくりビールを飲むことができた。次は中央アルプス、越百山、南駒ケ岳、空木岳という声が出た。

＊足利市に在住する私は足利高校山岳部ＯＢ会で活動しています。1月赤城山、3月春合宿、5月富士山、8月夏合宿、10月秋山、12月里山というペースで30年以上続いています。会員が高齢化しており、登れなくなってきています。

越後の名山を訪ねて（弥彦山、米山）
―ミニ越後シリーズ―

竹　中　　彰
（昭39（1964）年卒）

【日　程】 2022年8月7日～8日
【参加者】 本間浩、小島和人、佐藤久尚、竹中彰

今秋の一橋山岳部創部百周年記念事業の「北岳集中登山」参加に向けて少し体力面での準備をと思い始めていた7月下旬に、例によってトーチン会の本間さんから八ヶ岳北部縦走と越後の山の計画が寄せられた。前者については日程、コース等をメールで打ち合わせていたが、双方の思いやスケジュール調整が難航し、この間に体力検証に御嶽山登頂を試みていた本間さんが九合目辺りで退却したとの報に接し、暫く八ヶ岳計画は延期することとなった。

代わって越後の比較的著名な登りやすい山として、弥彦山、米山の連続登頂計画が浮上し、一昨年の蓼科山のメンバーである小島（65年卒）さん、脊柱管狭窄手術後復活した佐藤（久）（66年卒）さんを誘って4名で実施することとなった。（当初計画では刈羽黒姫山（891m）が候補にあったが、アプローチの悪さから除外された。）弥彦山は越後一之宮の弥彦神社として、米山は三階節などの唄で著名であるが何れもこれまで訪れる機会はなかった。なお、米山は日本300名山として日本山岳会が選定している。

小生も別途6月上旬にJACの神崎さんから新潟支部が主管する「高頭祭（7／25実施）」に誘われていたが、日程都合がつかず参加を断念していたので本間プランに乗ることとした。

本間さんは予て地元精通者の加藤（博）さん（76年卒、総務幹事）と打ち合わせて情報を仕入れ、最終計画案を纏めて宿とタクシーを手配し、メンバーに連絡して来た。

メンバーは山行日程とアクセスについて計画書に基づき出発までにジパングでJR乗車券、新幹線券を手配した。上越新幹線の燕三条（長岡）駅往復は明確だが、弥彦線、越後線、信越本線を利用して長岡駅に至る乗車券の買い方について出向いた駅の係員のアドバイスが区々であり、途中で若干の齟齬があった。何しろ弥彦線、越後線など通常お目に掛かれない新潟のローカル線を利用することは初体験であり、そのルートを理解するのも手間取った。

結果的には、東北地方を線状降水帯が襲い被害が生じていたにも拘らず、信越地方の天候は比較的安定し、計画遂行に問題はなかった。但し、コロナ禍で動きの鈍った身体には夫々の山の急登と暑さは格別応えるものだった。

8月7日（日）

東京駅（7:04発とき303）―燕三条―吉田―弥彦駅（9:25着）―弥彦山登山口（10:02発）―一合目（10:19）―二合目（10:51）―三合目（11:03）―四合目（11:36）―六合目（11:55）―里見の松通過（12:15）―七合目（水場12:15）―八合目ベンチ（12:45）―九合目（13:06）―奥社（13:30-14:00）―ロープウエー上駅（14:30）―弥彦神社参拝―弥彦駅―吉田駅発（16:52）―柏崎駅着（18:02）―ホテル・サンシャイン（泊）

久し振りに早朝4時過ぎに起床し、田園都市線つくし野駅発 5:38 の二番電車に間に合わせるべく、朝から高い気温の中で多量の汗かきを避け、駅まで自転車を漕ぐ。

渋谷で山手線に乗り換えるべく、最初の改

札口に向かった際には並んだ数台の改札機の何れにも乗車券投入口がついていないので稍焦ったが、裏に回って他の改札口の改札機には投入口があり、無事に入場できた。予定通り6:49に東京駅に着き、上越新幹線ゲートに向かう。

既に入線していた「とき３０３号」の４号車自由席の座席を確保してホームに出て駅弁屋で昼食２食を調達した。定刻発車後、本間さんにＳＭＳメッセージを入れると７号車にいる旨返信があった。昨年の火打・妙高行以来久しぶりの新幹線で越後湯沢を過ぎ、浦佐に至る間に車窓右手に八海山から駒ケ岳に至る２００６年に始まった越後シリーズで踏んだ山並みや４年前までの２年間勤務した国際大学キャンパス方面を懐かしく遠望する。

２時間の乗車で燕三条駅に到着し、乗り換えの為にホームに降りると本間、小島、佐藤のメンバー全員が揃った。陸橋を渡り、弥彦線ホームで10分余の待ち合わせで吉田行の電車が到着し、吉田駅での乗り換え後9:30頃に重厚な甍をのせた駅舎の終点弥彦駅で下車した。

駅前にタクシーが見当たらず、電話で営業所に問い合わせると配車に時間を要するとのことなので、弥彦神社横の登山口に向けて歩くこととし、朝から強い日差しを受けながら越後国一宮の弥彦神社拝殿脇を通過して、ロープウェイ乗り場への道を分け、木製の鳥居をくぐり、小川を渡り、10時前に杉木立の中の登山口に到着した。

2022.8.7　弥彦山登山口　撮影：竹中彰

暫く呼吸を整えた後に登山スタートし、緩い登りを辿って20分弱で一合目の石柱に着いて休憩する。この後も次第に傾斜が急になる中でジグザグを切った道にほぼ等間隔に合目柱が立っており、その後は我々もほぼこれに合わせて15～20分弱毎に休憩を取りながら蝸牛の歩みで進んだ。

本間さんは既に一合目でピッチが上がらないので、マイペースで行くとのことで別れ、三名で先行する形となった。登山道脇に簡易の東屋が設えてある「里見の松」を12:10過ぎに通過して間もなく、５ピッチで７合目の水場に着く（12:15～26）。ここに山の斜面から伏流水が現れ、小さな水槽と柄杓数本が置かれていた。冷えた水でノドを潤し生き返った心地がした。更に岩場混じりの20分でベンチのある８合目に至り、その後僅かの急登で頂上稜線に達し、ロープウェイ駅と頂上を結ぶ中間、９合目に到着した（13:06）。ここからは林立するＴＶアンテナ等の脇や、弥彦神社奥宮の社務所を通過し13分ほどでご神廟のある頂上（６３４ｍ）に到着した（13:30）。真夏の猛暑の中とは言え東京スカイツリーと同じ標高の山に登るのにこんなに苦労するとは想定以上だった。越後開拓の祖神天香山命（天照大神の曾孫）を祭神とするご神廟には我々の様な通常の登山者の参拝に比べて、

2022.8.7　弥彦山頂上にて
（左から佐藤（久）、竹中、小島）　撮影：竹中彰

何事かを願って一心に時間をかけて祈っている女性の姿なども見かけた。

山頂からの眺めは日本海側、越後平野側共に遠方の山並みは大気の湿度が高い所為か、何となく霞ってハッキリしないのが残念。日陰を求めて昼食をとり、ユックリ休む。目の前をオニヤンマが悠然と何度も同じ経路を往復している。今回テスト的にスズメバチ、アブ、蚊等の害虫対策で作り物のオニヤンマの模型を調達してザックに付けて来たが、その効果のほどは？気持ち的に何時もより蚊に刺される頻度が減っている様にも感ずるが・・・。

14時過ぎに下山を開始するが、9合目まで戻った所で暑さでへばり気味となったメンバーから万一のルートとして考えられていたロープウェイを利用しての下山が提案され、即決で頂上駅に向かうこととなった。この間に小島さんの携帯に本間さんが「里見の松」から下山したとの連絡が入っていた。頂上駅前に喫茶コーナーがあり、久しぶりにソフトクリームを食した。なお、窓越しに日本海の海岸線が遠望できたが、すぐ隣に高さ１００ｍのパノラマタワー（タワーの周囲を展望室が回転しながら上下する）が立っており、目障りな感も。

また、山麓から山頂傍まで14㎞弱の自動車道（弥彦スカイライン）が通じており、一般客誘致の設備が揃っていることも知った。

本間さんとの合流を期して８００円也の料金を払ってロープウェイに乗車する。慌ただしく頂上を辞した為に、事前に予定していた山上の大平園地内に設置されている日本山岳会設立発起人七人の一人、財政面の協力者、高頭式（仁兵衛）の寿像碑に詣でるのを欠いたことは残念だった。

ロープウェイは僅か5分ほどで麓に着き、送迎バスで登山口近くに送られた（14:30）。

そのまま近くの拝殿に向かい、弥彦神社に参拝して本間さんを待った。電話で連絡を取り合うもなかなか出会えず、かなり時間が経過した後に先ほどの登山口近くで合流し、そのまま歩いて弥彦駅に向かった。弥彦発16時過ぎの電車で吉田駅まで行き、越後線に乗り換え柏崎に向かい18時過ぎに柏崎駅に到着した。駅前ビジネスホテルにチェックインして人気のない街に出て居酒屋を探し、夕食をとった。

8月8日（月）

柏崎駅（7:49発）―米山駅（8:03）　タクシーで大平登山口へ登山口駐車場(8:25発)―林道分岐・大平登山口通過（8:45）―４ピッチ―二の字（10:13-10:30）―７７１ｍ峰通過（10:35）―２ピッチ―ガンバレ岩（11:32-40）―２ピッチ―米山頂上（12:09-13:10）―４ピッチ―林道登山口通過（15:30）―大平駐車場（15:50）―タクシー乗車―米山駅発（16:54）―長岡経由東京駅へ

朝6時にホテルレストランで朝食をとり、ザックを纏めてロビーに降り、柏崎駅前コンビニで昼食、飲み物類を調達して駅待合室で

待機する。同駅発7:49の直江津行信越本線に乗車して、15分弱の車窓に展開する夏の日本海の景色を観察する。

米山駅は無人駅でそのまま改札を出るが、駅前には何も商店がなく待機していた予約のタクシーに乗車後直ぐに出発した。15分程の乗車で国道8号線、北陸自動車道を越えて南下し、オガチ川に沿って進んだ先の大平（おおだいら）集落の自販機、簡易トイレもある登山者用駐車場に着く（標高２３５ｍ）。

＊米山の登山ルートとしては、我々が向かう大平コースの他に、谷根、野田、吉尾、下牧、水野林道と主なものだけで6つあるが、最もポピュラーなのが今回の大平コース。

道中で運転手から、米山に因んで88歳（米寿）で登りに来た登山者がいた等の話を聞く。地域情報によれば集落は6世帯16人居住のとのことで、ヒッソリしている。

駐車場で帰りの迎車を予約し、着替え等の不要な荷物をタクシーに寄託して出発する(8:24)。米山林道を外れ畦道を進みやや傾斜が強くなる中、再度林道に合流し、20分余で大平コースの登山口に至る。柏崎市が案内する5つの登山コースの内で最もポピュラーなコースで、ここから頂上までの所要時間は2.5時間とされている。なお、コース上には頂上までの距離２７００ｍを、地点ごとに登山口から及び頂上までの距離をそれぞれ記した赤い標識が設置されている。

登山口には山頂部の土砂が流出しつつある対策としての「土あげ運動」の案内と砂袋、土のストックが積まれていたが、負荷を少しでも抑えたい高齢者の我々は遠慮させて頂く(8:45)。登山口から道は傾斜のキツイ登りとなり、心肺機能の衰えをいやでも意識せざるを得ない。

木立に囲まれたルートであり、直射日光は遮られるが風が通らず汗がふきだす。ペースもなかなか掴みづらく、20分前後歩いては休憩を繰り返すことになった。

登山口から3ピッチ強で「二の字」と呼ばれる広場に着き(６５０ｍ)、給水、エネルギーを補給する（10:13-10:30）。この時までに本間さんはペースが上がらず、例によってマイペースで進むこととなった。休憩中に上から若い女性の二人連れが降りて来て、早朝は涼しくて登りも楽だったとのこと。出発して少し行くと狭い尾根を進む様になり、ここで「７１１ｍ峰」（セブンイレブンと称するとも）の標柱を通過した（10:35）。ここまでヤマップの記録では50分弱で到達しているが、我々は1時間50分要しており、予想以上のスローペースになっていた。この先で50－60ｍの下りがあるが、直ぐに登りとなり、階段やハシゴの連続する歩き難い道となる。また、植生も広葉樹が主体であるが、ブナの木が目立ち、中にはかなり立派なものも目に付く様になる。ひたすらの登りが2ピッチ続いた所に道脇の岩にガンバレと朱書きされた、所謂「ガンバレ岩」が出てくる（８００ｍ、11:30）。この岩を過ぎた所から木間越しに海岸線が望め、涼風も暫し暑さを忘れさせてくれる。傾斜は少し緩やかになり、少し先に「し羅場跡（しらばあと）」の標柱が立っていた。

＊〝し〟は屍から死を除いた字、意味は屍と同じ、なおコースガイドによれば下牧、水野林道コースの合流点から5分の場所にしらば避難小屋が設置されている。

また、明治の初めまでは、この先は女人禁制だった由。この先左手に道を分けるが、米山林道の終点から登る最短コース（ここまで25分）だが林道が崩落等で通行不能になっている。

小島、佐藤組と差が開き、暑さと疲れでもうギブアップかと弱気になって休んでいると、上から男女が降りて来た。大分前に「７１１ｍ峰」の近くで追い越して行ったペアで、

女性が「頂上は近い、小屋は涼風が抜けて涼しい」と励まされて最後の力を振り絞って歩き出した。

程なく、頭上に避難小屋が現れ、力が湧いてきた。頂上に着いて先ずはお薬師様に挨拶し、薬師堂の周囲を確認し、海岸線を含む麓を眺め、また、周囲に咲く大きなヤマユリを観察した後に先客1名がいた小屋に入った。ネットでは「日本一立派な避難小屋」と紹介されていたが、確かに大屋根の下に広々とした床張りの一階、二階があり、毛布等も用意されていた（12:28-13:10）。水場は登ってくる途中の分岐の近く、下り30秒とあるがもう少しかかりそう。

両側のドアを開け、窓を開けていれば涼しい風が通り抜け、真夏の昼さがり「昼寝」には最適な場所の感あり。暫くすると途中で戻るかもと言っていた佐藤さん（12:35）、小島さんが到着した（12:40）、本間さん（小島さんへの携帯連絡で途中、二の字の手前でギブアップとのこと）が抜けたのは残念だったが何とか3名で所期の目的を達成できて満足だった。昼食などをとった後に戸締りを確認して下山にかかる。

なお、米山の頂上には現在の地理院の一等三角点が埋設されているが、少し離れて陸地測量部以前に内務省地理局が明治15年8月に設置した「原三角点」が残されている。これは雲取山、白髭岩（群馬・下仁田）と共に現存する3個の一つと言う。

頂上を踏んで気持ちも軽くなったが、下りにも拘らずハシゴ、階段の連続でなかなかスピードは上がらず、事故の無いように慎重に下って行った。「ガンバレ岩」、「711m峰」でピッチを切った後もほぼ30分毎に休み、林

2022.8.8　米山頂上の薬師如来を祭る社　撮影：竹中彰

道登山口を15:30に通過し、朝と異なり急な階段のショートカット道を避けて，大回りではあるが米山林道を大平駐車場に下った。本当に大回りさせられて15:50に本間さんの待つ駐車場に到着した。人家が出て来た所で、道端に1～2m位の柱に奇妙な飾りが立っていたが意味、内容は不明。10分程度の時差で佐藤、小島さんも合流し、無事にタクシーに乗車して駅に向かう。駅に着くと16:54発の長岡行電車迄たっぷり時間があるので駅前の温かい水道で顔を洗い、汗を拭って衣装替えする。

冷房の効いた車内でウトウトするうちに長岡駅に到着し、新幹線時刻を確認してから構内の飲食街でヘギ蕎麦の「小嶋屋」を見つけ、ビール、日本酒で乾杯し、暫し歓談。残念ながらこの店には、越後の酒として加藤さんがお薦めの米山の麓・上越市柿崎の「吟田川（ちびたがわ）」にお目にかかれなかったのは残念なことだった。

19:17に予定のとき344号に乗車し、大宮で佐藤さんを見送った後東京駅には21時前に到着し解散した。

今回も本間さんの企画、手配になる越後シリーズ（弥彦山、米山）が無事に終了した。言い出しっぺの本間さんが今回の両山共に頂上を踏むことなく、体調不良で途中ギブアッ

プしたことは大変残念だったが、我々としては滅多に足を踏み入れることのない越後の長い海岸線を越後線、信越本線の車窓から垣間見ることが出来たのは幸せなことであった。

本間さんには88歳まで山登りを続けて、是非、米寿のお祝いに弥彦山、米山に挑戦してリベンジして頂きたい。

また、今回の山行に当たっては本間さんのアドバイザーとして現地に精通している加藤総務幹事の適切な助言、サポートの力に負うことが大きかったことを感謝したい。

初日柏崎での居酒屋（寿司屋）「海鮮市場」でのイカタコ三昧、長岡駅構内でのヘギ蕎麦小嶋屋での反省会など、それなりに現地の旨いものを食し、平均年齢80歳を超すパーティは残すところ余り長くない人生最終コーナーを愉快に過ごした2日間でした。　以て瞑すべし。

（２０２２．８．16記）

大天井岳日帰り

大　矢　和　樹
（平30（２０１８）年卒）

【日　程】２０２２年7月2日（土）
【参加者】大矢和樹（単独）
【行　程】中房温泉6:05 ― 合戦小屋7:20着、7:30発 ― 燕山荘8:05着、8:20発 ― 大天荘10:00着、10:10発 ― 大天井岳10:20着、10:30発 ― 大天荘10:40着、（昼食）11:00発 ― 燕山荘12:45着、13:05発 ― 中房温泉14:30着
合計：8時間25分（休憩込み）、休憩なしで7時間

最近は、登山以外にもサイクリングとスキーという2つのアウトドア趣味が追加され、特に冬場にはあまり登山をしなくなってしまっていたが、前週の赤岳・横岳・硫黄岳縦走（テント泊）、前々週の仙ノ倉山で久々にしっかりとした登山をして以降、再び登山のモチベーションが上がってきたところだったため、3週連続で登山をすることにした。前日夜、ヤマテンと睨めっこしていたところ、どうやら南より北のほうが天気がよさそうということで、北アルプスで日帰りかつ、がっつり歩くことのできるコースとして、休憩なしのコースタイム12時間台の大天井岳を選択した。（表紙写真参照）

大天井岳は学生時代には2度ほど訪れている馴染みの山ではあったが、社会人になってからはご無沙汰だったので、今登ったらどんな感覚なのだろうという気持ちもあった。当時は2回ともテントを背負って常念に抜けるコースだったので、単純比較はできないが、結論からすると明らかに社会人5年目の今の自分のほうが圧倒的にスピード感をもって歩くことができたのは間違いない。

前日は金曜日だったので当然仕事だったが、幸いにして早めに退勤できたので、新宿23:15発の扇沢行夜行バスを予約し、向かうことにした。当日19時過ぎにも関わらず夜行バスがあいていたのはほぼ奇跡だったと思う。なお、安曇穂高バス停で下車予定だったので、扇沢行でも同時刻発の白馬八方行のバスでもアプローチ可であった。

夜行バスでしっかり睡眠をとり、翌朝安曇穂高バス停に降り立ったが、ここで誤算があった。来ると思っていたバスが運行してい

なかったのである。確かにＨＰを見ると、穂高駅前4:40出発のバスは運行しない日で、まさかの駅前で2時間暇する羽目になりそうであった。しかしながら、そんな登山客がいると予測したタクシーが程なく来てくれたので、見も知らぬ客と相乗りして中房温泉に向かった。

中房温泉に向かう途中、かなり多くの車が中房温泉から折り返してきていた。理由は駐車場が満車だったとのことである。なお、同じ日に燕岳に登山した友人曰く、朝1時についた時点で第2駐車場が満車に近かったということなので、前日夜にでも車中泊しない限りトップシーズンの中房温泉に駐車することは不可能なようである。なお、タクシー運転手曰く、常念に通じる一の越登山口はさらに厳しく、路上駐車が多すぎてタクシーもまともに通過できないレベルのようである。乗鞍みたいにマイカー規制等引いてバスでも運行したらよいのではないかと思う。特に一の越ほど大人気登山口なら、バスを走らせたら儲かりそうな気がするのだが、私が学生時代だったころから今に至るまでバスの運行はない。

数年ぶりの合戦尾根の登りは非常に心地よかった。急登とされてはいるものの、歩きやすく、そこまで急でもないので、自分のペースでさくさく歩くことができた。予想はしていたが、朝から大変多くの登山客がいたが、道も狭くなくすれ違いやすいので不快感はゼロだった。淡々と一切休憩なしでマイペースで登っていたところ、コースタイムの半分ほどの時間であっという間に合戦小屋に到着した。老若男女みながスイカを求めて休憩していたので、当方も小休止した。ただ当方はスイカが苦手なので手を出すことなく、先に向かった。

燕山荘は中房温泉からほぼ2時間で到着した。合戦小屋以降、燕山荘までの道から見える景色があまりによかったので適宜シャッターを切った。また燕山荘から見える、鷲羽岳方面の山々もはっきり見え、その光景に懐かしさを覚えた。当時、大学時代は燕山荘まで登ってきたら結構疲れていたように思うが、社会人になって動き回っている今の自分には余裕であった。

燕山荘から大天井岳までの間の往復は、細かい虫と直射日光との戦いだった。7月上旬はどこの山でも比較的小さい虫が大量にわくイメージがあり、どこかで遭遇しそうな予感はしていたが、特に大天井岳周辺はかなりの量で非常にやっかいだった。蚊帳を持っていたら随分違ったのだろうと思う。また、直射日光は思ったよりも厳しく、かなり消耗した結果、燕山荘と大天井岳の往来はそこまで速いペースでは歩けなかった。なお、大下りの頭から下りきって15分程度進んだあたりには、まだ雪が残っており、慎重な歩行が求められる。場合によっては踏み抜きそうなレベルに薄いものの、そこ以外にルートがないので素早く慎重に進む必要があったので、そこが唯一注意点だったかと思う。

なお、燕山荘から下山中、徐々に積乱雲が発達してきていたため、雷雨になる前に下山したいと考え、かなり飛ばして下山した。燕山荘→中房温泉の下山も大して慎重になるべき個所はないので、淡々と下山した。下山し、荷物を整理し、温泉につかっているときに一気に雷雨になったので、危うく下山中に雷雨にあってしまうところではあった。やはり、自然の中でしっかり体を動かした後に、温泉につかるというのが、ＱＯＬを高めているとつくづく感じる。帰りは中房温泉から、燕岳に日帰りしていた友人の車に乗せてもらい都心まで送ってもらった。

9月、10月と紅葉で山はベストシーズンに入っていくので、万全の体調で、全国いろいろな箇所に繰り出していきたいところである。

『日本人とエベレスト』を読んで

佐藤周一
（昭54（1979）年卒）

山と渓谷社から本年3月1日に発刊された掲題書に関する読後感想です。既に多くの会員諸兄も読了されたことと思います。副題に「植村直己から栗城史多まで」と付けられている通り、日本人登山家によるエベレスト挑戦の歴史を綴ったものであり、個人的には中島寛・佐藤之敏両先輩が参加した日本山岳会隊（1969年～70年）に関する記載内容に関心がありました。後半部では「公募隊」が主流を占めるエベレスト登山の現状を明らかにした上で今後の展望も行っており、示唆に富んだ書籍です。

なお、本書は以下のように複数の執筆者による章立てになっており、初登頂物語も含め個人的に興味のある四章（第1・第7・第10及び終章）にフォーカスしながらコメントしたいと思います。（以下、登場人物等の敬称は略します）

【構成】

はじめに　（日本山岳会会長　古野惇）
第1章　初登頂へ、二つの登山隊
（山岳ジャーナリスト　江本嘉伸）
第2章　女性だけでエベレスト
（山岳ジャーナリスト　江本嘉伸）
第3章　「三季登頂」への決着
（元「山と渓谷」編集長　神長幹雄）
第4章　無酸素登頂への長い一日
（山岳ジャーナリスト　江本嘉伸）
第5章　交差縦走と「三国友好」
（元「山と渓谷」編集長　神長幹雄）
第6章　バリエーションの成果
（明大山岳部ＯＢ　谷山宏典）
第7章　悪夢の大量遭難
（元「山と渓谷」編集長　神長幹雄）
第8章　清掃登山と発信力
（元野口健エベレスト登山隊員
大石明弘）
第9章　記録への挑戦
（明大山岳部ＯＢ　谷山宏典）
第10章　日本人の公募隊
（登山ガイド・文筆家　柏　澄子）
第11章　「栗城劇場」の結末
（元「山と渓谷」編集長　神長幹雄）
終　章　これからのエベレスト
（登山ガイド・文筆家　柏澄子）

1．第1章「初登頂へ、二つの登山隊」
～初登頂を巡るドラマの数々～

1970（昭和45）年5月11日、植村直己・松浦輝夫の両名が日本人として初めて世界最高峰の頂上に立った経緯は針葉樹会員なら熟知されているはずで、今さら触れるべきことはないと思います。では本章のタイトルにある「二つの登山隊」とは何を指すのでしょうか。これは初登頂を目指す日本山岳会隊（以下、ＪＡＣ隊）＋三浦雄一郎のスキー登山隊のことです。ＪＡＣ隊が数年間に及ぶ事前交渉の末、1970年プレモンスーン期の登山許可を得るべく松方三郎隊長が前年2月にカトマンズに飛んだところ、既に「日本エベレスト・スキー探検隊」（代表：全日本山岳連盟・高橋照）がネパール政府から1970年2月～6月までの間での登山許可を得ていたことを知ります。当時、ネパール側のルールとしてはプレ及びポストの各シーズンごとに一国一隊のみと決められていた為、ＪＡＣ隊としては予想だにしない「先約」の登場に大いに困惑することになります。

このダブル・ブッキングの背景には1970年という年の特殊性がありました。それは同年3月から半年間に亘り開催された「大阪万博」の存在です。1968年にＧＮＰが米国に次ぐ世界第二位となった日本が高度経済

成長を謳歌する一方、ネパールもベトナム反戦運動等の政治的アクションが下火を迎える中、順調な経済発展を国際的にアピールするため、「仏教とヒマラヤ」をメインテーマとした「ネパール館」でのエベレストからのスキー滑降映像は格好の「目玉コンテンツ」だったのです。結局、スキー登山隊には「滑降」が目的であり「登頂」は目指さないという条件を付すことで、同シーズンでの同国二隊への異例の許可が下りますが、アイスフォールでの大部隊の交錯などリスクも抱えることになります。

そしてＪＡＣ隊は１９６９年４月23日～６月21日にかけての第一次偵察隊が南壁取付点を観察、「登攀可能」の報告をもたらした結果、中島・佐藤両先輩も参加した第二次偵察隊が同年８月20日～11月25日にかけて南壁８０００㍍まで試登。この時の偵察隊長・宮下秀樹（慶大山岳部出身）は、マナスル以来の大登山隊による攻略スタイルには批判的で「（手垢のついた）東南稜からの登頂には面白味が無い」と語っています。そして南壁攻略を確実にするため、ＪＡＣの長老である槇有恒が大学山岳部中心のＪＡＣでは力不足と考え、山岳同志会の小西政継に声を掛けることになります。「長年、日本の登山界に君臨してきた大学山岳部中心の組織が、社会人クライマーに屈した瞬間」と本章の執筆者は評していますが、些か大袈裟な表現ではないでしょうか。筆者は更に本隊による南壁攻略が惨敗した後、小西政継が「ただ歩いて登れるだけの一般ルートにキャンプを次々に設置し登頂してきたこれまでの大学山岳部の人たちにエベレストの、しかも南壁（注：小西著の原典では南西壁）なんか登れる訳がない」と語っていたことを明らかにし、「（小西は）そういう気持ちでＪＡＣ隊に参加したのかと、ため息が出る」とも記していますが、大学山岳部出身者と社会人山岳会出身者の隊員間の確執を殊更に強調している感があります。

中島先輩の『一期一会の山、人、本』では、このような確執について一切触れられていません。ただ「エベレストの南壁を登っていて感じる大きさは、僕が30年間この世に生きてきた中で、僕が身体で感じ取ってきた大きな枠からは、どうしてもはみ出してしまう。（中略）技術さえ磨けば登れる：そういったことではどうにもならないという絶望感、いらだたしさ。もっと根源的な何ものかを問われている。大げさに云えば自分の思想が試されている、といった感じだった」（同著「エベレスト南壁をめぐる個人的感想」より）と記しているのみです。

一方、本章筆者が狙う「ＪＡＣ隊の戦略面での混乱（太平洋戦争時のミッドウェイ作戦の如き二兎追い）や当時の世相的な反映」の描写意図は、それなりに理解できますが、前掲のような学歴格差意識など独自の価値判断をベースに据えながら、ややジャーナリスティックな視点に偏り過ぎた記述ではないかと違和感を覚えたのが率直な感想です。

２．第７章「悪夢の大量遭難」
～初期公募登山隊での日本人犠牲者～

周知の通り、近年のエベレスト登山は公募登山隊によるガイド登山が主流であり、数百万円の資金と一定水準以上の体力と登山技術さえあれば「誰でも登れる山」になっています。初の公募登山隊は１９９２年、ＮＺ出身の登山家ロブ・ホールにより組織され、その年の５月に七か国のクライアント９名とシェルパ５人を一度に登頂させたのを嚆矢に、以後毎年公募隊を組織し、多くのクライアントを頂上に立たせる実績を残しています。

こうした公募登山隊がエベレスト登山の主流となった背景は以下の三点であると本章の執筆者は分析しています。

①高所ガイドとしてのシェルパの成長と層の厚さの獲得
②装備の軽量化、特に酸素ボンベの軽量化と入手の容易化
③情報通信機器等のハイテク機器の普及

これらの要素を背景に、クライアントが登山だけに集中できる態勢をビジネスモデル化したのが公募登山隊です。従前のスポンサー登山ではない分、仮に登頂に失敗しても自身が損失責任を負うだけなので高所で無理をするリスクも軽減することになります。

しかしながら、デスゾーンを伴う「極地」としてのエベレストは、どれほど経験豊富なガイドやシェルパがサポートしたとしても、ひとたび気象条件等が悪化すれば登山者は為す術なく敗退することを明らかにしたのが1996年5月10日に起きた大量遭難事故です。この日、ネパール側から公募登山隊2組を含む3隊が頂上を目指し、22人が登頂を果たしたものの、下山中の天候悪化により5人が亡くなったほか、チベット側からはインド隊3人が登頂したものの、下山中に全員が疲労凍死しています。公募登山隊の中にはロブ・ホール率いるNZ公募隊があり、田部井淳子に続く日本人女性第二登（七大陸最高峰制覇も）果たした難波康子（当時47歳）が下山途中でブリザードに遭遇、ロブ・ホールら本隊とはぐれ、サウス・コル付近で凍死する悲惨な結末を迎えます。

早大で山歩きサークルに所属した難波は外資系の航空貨物会社に勤務するOLで、結婚後も休暇をやりくりしながら全て自己資金で海外の山にガイドツアー（加藤保男・長谷川恒男等による）を利用しながら登山するスタイルでした。ロブ・ホールの公募隊はビンソン・マシフ以来三回目の利用で、彼女は彼に絶大な信頼を寄せていたそうです。

結局、この日のロブ・ホール登山隊は隊長を含む4名が遭難死、もう一つの公募隊も隊長が遭難死するなど悲劇に見舞われ、プレ・モンスーン1シーズン中に計12名もの死者を数えることになります。この不名誉な記録は、その後、2014年4月にアイスフォール崩壊により16人が死亡する事故が発生するまでエベレスト登山史上最悪でした。

この初期公募登山隊の挫折は、ガイドとクライアント間の関係性を提起することとなり、登山中の全ての判断をガイドに任せて良いかどうか等の議論が起きることになります。標高4千㍍程度のヨーロッパ・アルプスなら、経験豊富な現地ガイドの判断に間違いは生じないとしても、8千㍍超のヒマラヤではガイドも想定し得ない事態が生じる可能性も高く、クライアントの自己責任問題も浮上することになりました。

因みに、2002年春にNZ出身の登山家ラッセル・ブライス率いる公募隊でエベレスト登頂を果たした東大スキー山岳部出身の山田惇（登頂時23歳）は、当時の日本人七大陸最高峰登頂の最年少記録欲しさに公募隊という選択肢を戦略的に選んだとしています。そして現在では国内外の登山ツアーを催行する会社の経営者として成功していますが、「自分自身の体験から言って、公募隊を組織して顧客を8千㍍の世界へ連れて行くというのは想像できない。（中略）僕は山で動けなくなった人がいたら担いで下ろせなければいけないと思っているので、それができない山へ人を連れて行くなんて、とてもできない相談です。」と率直な心情を吐露しています。（本書のインタビューコラムから）

３．第10章「日本人の公募隊」
～新たなタクティクスの確立～

日本人ガイドによるエベレストの公募登山は、国際山岳ガイドとして活躍する倉岡裕之（明大卒：60歳）と近藤謙司（都立高卒：59歳）の二人によって牽引されてきました。海外山岳でのガイドは倉岡が少し早目に着手したものの、二人がエベレストに公募隊を率いて向かったのは奇しくも同じ２００４年に、しかも同じチベット側ルートから。以来、コロナ前まで毎年のようにエベレストを含む８千㍍峰のガイドを続け、倉岡で延べ31人、近藤で21人のエベレストサミッターの登頂をサポートしています。近藤氏の従兄弟が一橋大卒業生（昭56卒）で、その従兄弟を通じて紹介された私から見ても、氏は社交性に富む快活な人物で日本山岳ガイド協会において国際交流委員会のチーフを務めています。

倉岡・近藤の先駆者二人によれば、エベレストにおける公募隊登山には二度の転機があったそうです。一回目は前出の１９９６年の大量遭難。この大惨事が契機となり、様々なロジスティックが洗練されました。例えば、より確実性の高い天気予報の活用や、酸素ボンベの使用数増加、サポートするシェルパの人数増加などです。シェルパの数は現在では顧客に対して同数のマンツーマン態勢が「常識」となっています。

二度目の転機は、２０１４年のアイスフォール崩壊事故です。ルート工作中のシェルパ16人が死亡した事故を機に、あらためてシェルパの報酬や保険等の待遇・福利厚生面が見直されることになります。それまでは低賃金の「３Ｋ職種」と見做され、子ども達を登山に関わる仕事に就かせたがらなかった彼らの意識も変化していくことになります。サービス業としてのガイド業の将来性に目覚め、ネパール人によるツアー会社が台頭し始めます。

こうして現在では、公募隊のパイオニアである欧米人ガイドによるツアー、日本人ガイドによるツアー、そして新興のネパール人ガイドによるツアーが混在している状況です。この内、近藤謙司は特に日本人クライアントのみで構成する公募登山に拘ってきました。彼が確立した「一般人のエベレスト攻略ノウハウ」は凡そ次の通りです。

①いきなりエベレストを目指すのではなく、６千㍍峰（アイランド・ピークやロブチェ・ピーク）や８千㍍峰（チョー・オユーやマナスル）を少なくとも一座ずつ経験してもらう。

②カトマンズ以降キャラバン中のストレス軽減や体調管理を重視する。特に食事管理の重要性（悪い油を使うことの多い現地食は避けるなど）

③ＢＣと休養地間でのヘリコプターの積極活用。（天候理由や顧客の健康管理等でナムチェバザールまで往復する際の活用など）

価格面で云えばネパール人が経営する会社の公募隊が安いのですが、言葉の問題やカルチャーショックがストレスとなってボディブローのように登山者に影響することを考慮すると、日本人ガイドと登る方が優位となるのは十分理解できます。近藤自身も顧客を遭難死させるなど苦い経験を積んできているだけに、こうしたタクティクスの蓄積は貴重な財産とも云えるのですが、懸念されることは先駆者二人の後継者が育っていないことです。既に還暦前後となった彼らのエベレスト登山に賭ける想いを引き継げる人材の育成が、日本人登頂者を増やすためには必須の課題と言えます。

４．終章「これからのエベレスト」
～たかがエベレスト、されどエベレスト～

コロナ感染拡大前の２０１９年５月、ネパールの登山家ニルマル・プラジャがフランスの通信会社ＡＦＰを通じて配信した一枚の写真が物議を醸すことになりました。それはエベレスト山頂へ続く登山者の長蛇の列。プレ・モンスーンでの登頂を目指す各登山隊が最も天候の安定した５月22日（ベストデイ）に集中した結果、東南稜のデスゾーンでの渋滞という珍現象が発生し11人もの死者が出ましたが、ネパール観光局は「遭難は登山者自身の実力不足や高山病等によるもので、渋滞が原因ではない」とコメントしています。

この日の翌日に公募隊を率いて登頂した近藤謙司は「あえてベストデイではなくベターデイを選んだ理由」として「確かにベターデイでは下山中の天候悪化も考えられるが、それよりも渋滞にはまるリスクの方が恐ろしい」と語っています。渋滞がひどくなれば登頂にも下山にも余計に時間を要するわけで、空気中の酸素量が平地の三分の一しかないデスゾーンでの滞在が長引くことによる様々なリスクの増大、ボンベの酸素量が持ちこたえられるのかといった問題も抱えることになります。

この「渋滞事件」に象徴されるエベレスト登山者が急増した要因を、本章執筆者は次のように分析しています。

①ネパール政府による登山許可の緩和

かつての「１シーズン１隊」原則は改められ、９歳以上69歳以下なら誰でも登山許可を得られるようになった。特にエベレストは登山料が１万ドルと他の山岳に比べても高いことから、外貨獲得源として大きな比重を占めている。

②公募登山隊の多様化・低価格化

前項で触れた通りだが、特にネパール人が経営するツアー会社の台頭が大きい。本章に登場する山岳ガイド・岩田京子は私のガイド仲間であり、２０１９年５月にネパール人ガイドによる公募隊に参加、ベターデイに登頂しているが、彼女は同じガイドに率いられ８千㍍峰４座の登頂に成功している。エベレスト登山の費用は日本の公募隊に比べ６～７割で済んだそうである。

③ＳＮＳによる情報収集量の増大

エベレストに限ったことではないが、登山とＳＮＳによる投稿がセット化し、ＹｏｕＴｕｂｅ等を通じて個人体験を気軽に送受信できるようになったことが大きい。ヒマラヤ登山がより身近になり、自分もやってみようと思い描きやすくなった。

ネパール政府が観光立国としてのビジョンに基づき登山料収入を重視し入山を歓迎している以上、エベレストに登山者が集中する状況は当分続くものと思われます。

さりながら近藤謙司は、登山者の質の低下が避けられない中、２０１９年５月のような遭難事故の再発防止に向けて、ネパール観光省の登山許可発行の際に「諮問機関による審査制度の導入」を提唱しています。これは既に61人ものネパール人の国際山岳ガイドがいる現況に鑑み、彼らが所属する組織・ガイド協会や登山協会が主体となって諮問機関を構成、許可申請する登山者の登山歴などをチェックするというもの。

一定期間内の入山者数の制限と併用すれば、質の低い登山者の入山抑制や大量遭難のリスク回避も、ある程度は実現できるかも知れません。

いずれにしろ、世界最高峰の「冠」は未だにその輝きを失うことはなく、富裕層を中心に50代・60代登山者も増え続け、どんなに「大衆化」が進むと云われようとも、今後も様々な挑戦の対象になり続けていくことで

しょう。「たかがエベレスト、されどエベレスト」です。

むすび

本書の「はじめに」で、ＪＡＣ会長の古野惇が２０１９年12月に「アルピニズム」がユネスコの世界無形文化遺産に登録されたことに触れています。エベレストが１９５３年にヒラリーとテンジンによって初登頂され処女峰が消滅した後に、本多勝一は「パイオニアワークは終った」として冒険的登山の終焉を宣言しました。しかし、大航海時代に遡る冒険の長い歴史を誇る欧州では、困難なルートや高峰に挑戦する登山者の行動は依然として尊敬の対象とされ、未踏ルートの飽くなき探求が「冒険」精神における最高の価値として今日も認められています。本多勝一と同じく京大出身の今西錦司が、学問の世界での「パイオニアワーク」に触れて「冒険の本質は、未知のフィールドに立って先人の議論や知恵の上に学問の新しい分野を切り拓いていくこと」としていますが、まさにこの点がユネスコが「アルピニズム」というパイオニアワーク的行為に普遍的価値を認めた所以ではないでしょうか。

そしてエベレストは依然として登山行為の究極の目標として存在し続けており、前述のように一定の条件の下、「誰でも登れる山」にはなったものの、憧れの対象であることに変わりはありません。諸条件が整備されつつある現在、公募隊形式ならば一橋山岳部の学生あるいは針葉樹会員がその頂きに立つ日も、そう遠くないのでは：と感じます。

特に学生諸君には、本書を参照しつつ世界無形文化遺産となった「アルピニズム」の現代的意義について十分に考察しながら、新たな目標作りに役立てて欲しいと願います。

（追記） 本稿初稿を提出後、『さよなら、野口健』という本が出版されたので、目を通した上で少し追記させて頂きます。これは野口のマネージャーを務めた小林元喜が書いた一種の暴露本で、『日本人とエベレスト』第８章でも記載されているエベレスト登頂後に始めた清掃活動に至る背景がより詳しく描写されています。『日本人と・・』の第11章に登場する栗城史多（のぶかず：２０１８年に単独無酸素登頂を目指すも遭難死）と並んで「異端児登山家」として描かれている野口は、外交官を父に持つエリート一家に育ちながらも学業成績が悪く劣等感に苛まれていた折、植村直己の『青春を山に賭けて』に出会い、登山を通じて自己実現を図ろうとします。そして１９９９年春、三度目の挑戦でエベレストに登頂し、当時の七大陸最高峰最年少記録により名前が売れると、そこから彼は登山そのものの深堀りではなく、清掃登山活動に重心を移し「環境保護と登山活動の両立」を目指すことになります。『日本人と・・』では好意的に描かれていますが、『さよなら・・』では、登山家として三流の彼がスポンサーを獲得し続けるために執った苦肉の策であり、将来的には政治家への足掛かりに利用している：と手厳しく評されています。

因みに野口自身は「アルピニスト」という肩書を使用していますが、これもサバイバル登山で有名な服部文祥から「（栗城と野口は）所詮、（マラソンの）市民ランナーでしかない。真剣に登山に向き合うアルピニストを侮辱している」と酷評されています。

以上、野口を取り上げた第８章に触れていなかったこともあり、追記とした次第です。

一橋山岳部　部歌

山讃賦

創部百年統一歌詞

松崎　武雄　作詞

一番

紫の　雲ゆらめけば
白銀を　射るや金箭
おごそかに　山鳴りわたり
靈香の　四方に薫じて
山々は　いま明けんとす
君見ずや　東の空

二番

大聖の　世を呼ぶごとく
山神に　炬火をかざして
ものみなの　生命のうへに
悠久の　光と熱を
おしゆなり　いざ市去りて
崇嚴の　山におろがめ

三番

岩桔梗　黒百合咲ける
花園を　つゝむ山霧
はいまつの　蔭より蔭を
おほらかに　遊ぶ雷鳥
若人は　六根清浄
唱えつゝ　双手ふるなり

四番

あゝ山は　吾が行く殿堂
あゝ山は　わが棲む宮廷
煩悩も　邪悪も忘れ
法悦と　歓喜にみちて
山嶺を　遠くきくとき
うつゝなく　ゐまひするかな

「山讃賦」創部百年統一歌詞について（補足説明）

総務幹事　加藤　博行

山岳部の部歌「山讃賦」は１９３１年に誕生して以来、針葉樹会の集まりでは最後に熱唱する伝統が、長く引き継がれてきています。しかし、その歌詞の読み方については時代によって異なり、残念ながら統一されないまま今日に至っています。（会報77号「山讃賦」由来　増山会員、１２９号　部歌「山讃賦」の謎　蛭川会員）

その一方、近年の現役部員からは「部歌は歌う機会もないので知りません」と言われ始めて久しく、このままではＯＢが懐かしく歌うだけで、部歌が伝承されない恐れが出てきました。２年半前の２０２０年１月新年会を終えた時、一部会員より「読み方を統一すべき」との意見が寄せられ、翌２月の三月会で、以下の方向付けを得ました。（会報１４６号）

〝原作に漢字の表記はできる限り合わせた上で、統一の読み方にする〟

1．題名「山讃賦」は「さんさんぷ」と読む
2．1番の「白銀」は「はくぎん」とする
3．1番の「霊香」は「れいこう」で統一とする
4．4番の「殿堂」「宮廷」は70年代以前が「でんどう」「きゅうてい」、その後「ところ」「みやい」の読み方になったが、経緯をもう少し調査して一本化する

しかし、その後のコロナ禍で、総会／新年会がまともに開催できず、加えて現役の部活動も、この2年間は多くの制約により、漸く復活しつつあった技術や登り方の伝承が、再び厳しい状況に直面し、いまコロナ禍後の部活動立て直し時期にあります。お陰様で、直近では新入部員の増加により、部員数は復活しつつあり、新しい世代による活発な部活動が期待されるところです。そこでこの機をとらえて、ぜひ多くの新しい部員に「山讃賦」を覚えて歌い繋いでいってもらいたいと考え、今回の総会で試みとして、読み方を統一した譜面を用意させていただきました。歌詞の意味やメロディーを学生の皆さんに紹介し、学生・OBが同じ歌詞で斉唱していただくことを総務よりお願いした次第です。

題して「創部百年統一歌詞」です。（添付歌詞参照）

この統一歌詞は、従来統一できていなかった4番の「殿堂」「宮廷」の読み方をそれぞれ「ところ」「みやい」とさせていただきました。「ところ／みやい」を採用した理由は、漢字学的考察は別として、この歌が5・7調のリズムになっており、この方が圧倒的に歌い易いからです。またその歌い方をしてきた世代が、OB会員の6割を超えてきたことも一因ではあります。今回の統一歌詞作成にあたっては、それに加えて、原作の歌詞1～4番すべてに統一フリガナをつけ、5・7調のリズムを明示するため、5と7の間にワンスペースで区切り、歌いやすいようにしました。この作成にあたっては、前掲の蛭川会員（64年）より、多くの助言をいただきましたことをここに御礼申し上げます。

長く「でんどう」「きゅうてい」で熱唱してこられた世代の皆さんのお気持ちは、重々承知しております。それにつきましては、ひたすらご容赦お願い申しあげ、ここは現役への部歌伝承の観点から、何卒ご理解いただきたいと存じます。なお作成中の創部百年記念誌にも、部歌誕生から統一歌詞に至る経緯について述べ、歌詞と譜面を掲載し記録に残す予定です。幅広い会員の皆様のご理解を宜しくお願いします。

部報「針葉樹」と「針葉樹会報」のホームページへの掲載

創部１００周年の記念事業として「針葉樹」（１号～１５号）「針葉樹会報」全号がホームページに掲載されました。どうぞお楽しみください。

（図書幹事　中村雅明）

訃報

蛭川隆夫会員（１９６４年卒）が、９月２８日に逝去されました。
心よりお悔やみ申し上げ、謹んでご冥福をお祈りいたします。

（総務幹事　加藤博行）

会務報告

２０２２年（２０２１年度）針葉樹会総会報告

▽総会報告

以下の通り開催されました。

日時；２０２２年７月22日（金）
18:30～21:00

場所；如水会館14階「記念室東西」

Ⅰ．総会の成立

総会員数　特別会員３名、会員１３９名

内議決権行使会員　４名（賛成）、

委任状提出会員　41名、

出席会員　17名

合計62名の総会出席者数となり、会員１３９名の３分の１以上（47名以上）の規定を充たし、総会が成立しました。

Ⅱ．出席者及びオンライン参加者

会場出席会員（17名）：

永井、竹中、小島、小野、佐藤（久）、岡田、中村（雅）、井草、前神、加藤、佐藤（周）、岡部、中西、小林、谷津、川名、内山

出席学生（12名）：

岩崎、猪股（４年）、重岡、塚本（２年）亀井、黒川、清水、田村、中林、前田、吉川、小松（１年）

オンライン参加会員（８名）：

小西顧問、金子、斎藤（誠）、石丸、白石、糟谷、内海、大矢

Ⅲ．総会議事

加藤総務幹事の司会のもと、前神会長が議長席につき、総会を開始しました。

１．２０２１年度活動報告

加藤総務幹事より、２０２１年度の活動を一括報告しました。（報告内容要約）

１）会合

①幹事会（２０２１年６月20日）②定期総会（２０２１年７月９日）③臨時総会＊（２０２２年１月21日）④新年会（２０２２年１月21日）⑤卒業生をお祝いする会（２０２２年３月15日４名の卒業生出席）

⑥三月会（２０２１年９／27、10／18、11／15、12／20、２０２２年３／21、４／18、５／16）７回

＊臨時総会では、創部１００年記念事業の特別予算を決議した。

2022.7.22　針葉樹総会　撮影：加藤博行

２）学生支援

①学生幹事会の実施

２０２１年６／９、10／13、12／８、２０２２年２／16、５／18　合計５回

２か月に一回のペースで、２０２１年中

はオンラインでの参加者も多かった。

②ＯＢ／学生共同山行

２０２１年６／19日　原川カロー川谷佐々木、半澤、山田（ＯＢ）

９／19－20　笛吹川ナメラ沢　佐々木、半澤、前神（ＯＢ３）針葉樹会会報発行第１４８号（２０２１年５月）、第１４９号（２０２１年11月）第１５０号（２０２２年５月）

4）懇親山行

２０２１年12月　コロナ禍の影響もあり、富士山ビュー山行「扇山」のみであった。

5）ホームページ関係

①ホームページの内容充実により、会員のアクセスを高めることを目指したが山行記録等の掲載は大きく減少し会員のアクセス数も減少した。

②その一方、創部１００年記念事業で実現した、針葉樹&針葉樹会報デジタル版をホームページにアップし、会員に公開した。

③登山届メール、下山届メールのフォーム一部改善（会員からの要望）

登山／下山届メールの発信人へコピー戻し、下山届メールの特記事項欄追加（山行の簡単な報告）

6）図書関係

①針葉樹&針葉樹会報デジタル化

②針葉樹会報合本

２分冊（１０１～１２５号、１２６～１５０号）x　３セット

※３セット（国立部室、ＪＡＣ図書室、芦安山岳館）

7）創部90周年記念事業（継続事業）

新型コロナ感染症まん延のため、３年連続中止となった。

8）創部１００周年記念事業

①百周年記念写真誌の作成

井草、前神、兵藤、加藤にて編集会議を重ねる。２０２１年12月18－20日に八王子セミナーハウスにて、上記に加え、小島顧問、佐藤（周）も参加し、集中編集会議を実施

②部誌「針葉樹」ＯＢ会誌「針葉樹会報」の総デジタル化（図書幹事と連携）

針葉樹１～14号（15号はデジタル版あり）及び針葉樹会報１～１１０号（それ以降はデジタル版あり）を２０２２年３月デジタル化完了し、ホームページに掲載した。更に追加作業として１００年記念写真誌作成のための資料として、戦前針葉樹會報（１～９９号）のデジタル化前倒し実施

2．２０２２年度活動計画（議案１）

加藤総務幹事より。今期の活動計画について、一括説明しました。

1）会合

①幹事会（２０２２年６月20日）

②総会（２０２２年７月22日）

③新年会（２０２３年１月）

④卒業生をお祝いする会（２０２３年３月）

⑤三月会（原則毎月第３月曜日　１月／７月はお休み）

2）学生支援

①学生幹事会の開催

これまで同様に偶数月の第二水曜日夜にて開催予定。第一回は６月15日を予定。

②ＯＢ／学生共同山行の企画。６月３－４日、針ノ木雪渓での雪上訓練を実施。10月１－２の週末に北岳登頂を山行幹事による計画立案としたい。

3）針葉樹会会報発行

①第１５１号（10月発行）　②第１５２号（２月頃）　③第１５３号（２０２３年５月頃）を予定

4）懇親山行実施計画

①２０２２年６月上旬　針ノ木岳（６月３～５日に実施済み、参加者会員６名、学生15名）

②２０２２年10月初旬　１００周年記念

北岳（&周辺）　佐藤（周）幹事＋1～2人
③2022年12月中旬　富士山ビュー山行、中央線沿線　佐藤（周）幹事
④2023年5月中旬　新緑と残雪山行　谷川岳周辺　兵藤幹事
5）ホームページ関係（兼総務関係）
①ホームページの内容工夫により、会員（特に若手OB）のアクセスを高める
・幹事による原稿依頼（山行記録等）
・特設コーナーの設置「一橋山岳部100周年に向けて」「会員の皆さんの消息」
②ホームページの総務関係情報整理推進
・会員名簿メンテナンス継続
6）図書関係
①部誌の補修（解体製本）
②「一橋山岳部&針葉樹会年表」、「一橋山岳部在籍者名簿」の改訂
③会員蔵書の部室保管（部室2階に本棚設置）
・蛭川隆夫会員蔵書・宮川守久会員蔵書
④部室蔵書目録の改訂と公開（HP）
⑤針葉樹&針葉樹会報の残部整理（長期保管）
7）創部90周年記念事業（継続事業：南アルプス市芦安地区周辺の登山道整備）
高谷山整備事業は、芦安ファンクラブの活動が2022年6月再開されたので、当会も、高谷山周辺の整備（高谷山～桧尾峠）について、来春を目途に参加を計画する。
8）創部100周年記念事業
①創部100年記念誌（仮題「一橋山岳部百年」）
百周年記念写真誌を2023年新年会での配布を目指して、編集・校正作業を進める。B5サイズ、ハード・カバー、本文モノクロおよそ200ページ（内カラー32ページ）程度の写真誌となる見込みで300部作製予定
②創部100年記念月見の宴
学生とOB合同で、拡大月見の宴を11月5日（土）夕方より奥多摩（鳩里庵）で実施予定
③創部100周年記念山行
北岳及びその周辺の登山を2022年9月最終週～10月2日に計画
（創部100周年記念事業の費用は参考資料「現時点での見込み」を参照願います。）
9）会員の異動
・入会（2022年7月22日付）
井上　仁　（2022年3月卒業）
内山　晴貴　（2022年3月卒業）
川原　の乃　（2022年3月卒業）
横尾　一眞　（2022年3月卒業）
谷津　範之　（1982年3月卒業）

3．2022年度役員・幹事の選任（議案2）
（決議事項）
今期は佐藤（久）幹事が山行幹事、保険幹事を退任、新たに井上新会員が、図書副幹事へ就任となった。（p31第2表参照）

4．2021年度決算、2022年度予算および遭難対策基金収支見込み（議案3）
中西会計幹事より、2021年度決算報告を行い、本決算は既に本間・佐藤（活）両監事より監査を受け承認された旨報告があった。続いて2022年度予算の提案があった。
今期は収支が赤字となる予算を組まざるを得なかったが、若い会員の会費支払いをお願いしたい旨、補足説明があった。
（p30別表1、p32 3表参照）

《一括質疑応答》
議長より3議案についての一括質疑応答に入りました。
竹中会員より、予算について昨今の涸沢のテント場の料金は昔考えられないほど高額となり、学生の長い定着合宿にこの支援予算で十分かとの意見があった。それに対し、学生担当の前神幹事が、今のところ学生は夏でも短期間の山行に終始しており、いずれ長期の

定着が復活すれば、検討する必要があると説明した。

暫くして、議長が議案について決議を図ったところ、**満場一致で承認されました。**

決議終了後、山岳部岩崎主将より、学生の活動状況の報告があった。

1）２０２１年度一般会計決算（p33 第４表）
2）２０２２年度一般会計予算（p34 第５表）
3）２０２１年度山行記録（p39 第６表）
4）２０２２年度山行計画（省略）

以上をもって、２０２１年度針葉樹会総会全議事を終了しました。会員の皆様のご協力有難うございました。

Ⅳ．懇親会

総会終了後、小島相談役のご挨拶と乾杯発声で創部百年を祝した。３年振りにリアルで会員が参加した懇親会に移り、食事会に入った。ただ従来のブッフェ形式に戻るのはまだまだ難しく、今回は個人毎のコース料理となった。

食事中、前神会長より、制作中の「一橋山岳部　百年」の初稿サンプルページをスクリーンにアップして、百年の時代を駆け足で振り返った。

今後完成に向けて、会員への協力をお願いすると共に、来年1月の新年会で出版記念を行うので、多くの特別協賛をお願いしたいと、締めくくった。

その後、オンライン会員からの自己紹介を兼ねたスピーチ、また会場会員のスピーチと続き、今年の新入部員を中心とした山岳部員の自己紹介に入った。

最後に、加藤総務幹事より、恒例の山讃賦斉唱に際し、これまでの山讃賦の歌詞の読み方をこの機会に統一させていただきたいということで、「山讃賦　創部百年統一歌詞」の説明があった。１９７０年代以前のシニア会員には、違和感のある読み方であることは承知しつつ、この素晴らしい部歌そのものが継承されなくなりつつある現状を踏まえ、統一した歌詞とその意味を簡単に解説させていただいた。

その上で、ホームページ上にあるピアノ伴奏音に沿って1，４番を斉唱し、記念撮影をして、お開きとした。

総会を終えての課題

今回も、会場出席とオンラインのハイブリット型総会としたが、オンライン会員とのコミュニケーションの取り方の難しさを痛感した。議事進行においてはその方式でよいとしても、リアルの会場で飲食する会員とオンライン会員の懇親は難しく、今後の進め方の課題としたい。今年度の大きなイベントである、創部百年記念集中登山、拡大月見の宴、新年会等が、コロナ禍を避け、多くの会員参加により、盛大に行われることを期待したい。

（２０２２年７月31日記　文責　加藤）

別表1　　【針葉樹会2021年度　一般会計決算（案）】　　2022/5/31

（2021年6月1日～2022年5月31日）

（単位：円）

支出			収入		
（項目）	実績	予算	（項目）	実績	予算
会報発行費	302,709	480,000	前年度繰越	5,666,998	5,666,998
山岳部補助	100,440	100,000	納入会費	498,000	700,000
通信連絡費等	155,860	120,000	（普通会費）	(370,000)	(500,000)
慶弔費	8,800	30,000	（賛助会費）	(128,000)	(200,000)
日本山岳会費	14,000	14,000	会合余剰金	0	0
Home page年間維持経費	100,440	100,000	預金利子・利息	46	40
図書関係費用	42,350	59,600	寄付金	0	0
芦安登山道整備	0	50,000	会報販売代金	0	0
学生登山研修補助	17,009	60,000			
合同登山補助	0	50,000			
学生合宿補助	90,330	140,000			
大学体育会ＯＢ/ＯＧ連絡経費	0	5,000			
創部100周年記念会報準備経費	87,930	100,000			
（支出小計）	919,868	1,308,600	（収入小計）	498,046	700,040
次年度繰越	5,245,176	5,058,438			
（合計）	6,165,044	6,367,038	（合計）	6,165,044	6,367,038

前年度繰越金　：三菱ＵＦＪ銀行　5,666,998円

（収入）
・普通会費　：58名
・賛助会費　：17名
※’59卒市川会員より ’21,12/9 付で100周年記念向け特別賛助金2百万円を拝受、翌日付で″100周年記念″口座へ移替えを実行済み。

（支出）
・会報発行費　：針葉樹会報　149/150号
・通信連絡費等　：新卒学生お祝い会等
・慶弔費　：’58卒岡垣、’56卒尾身各氏花代等
・図書関係費用　：合本費含む
・芦安登山道整備　：新型コロナ感染による中止
・学生登山研修補助　：雪山登山技術研修参加
・学生合宿補助　：夏山合宿18名
・創部100周年記念会報準備経費　：資料収集等
（大町山岳博物館訪問、編集合宿費・会議費等）

【針葉樹会2021年度遭難対策基金決算（案）】

（2021年6月1日～2022年5月31日）

支出			収入		
（項目）	実績	予算	（項目）	実績	予算
			前年度繰越	3,157,374	3,157,374
支出	0	0	うち遭難対策基金	2,257,374	2,257,374
			うち遠征基金	900,000	900,000
			利息等	54	300
（年度内実支出　小計）	0	0	（年度内実収入　小計）	54	300
次年度繰越	3,157,428	3,157,674			
うち遭難対策基金	2,257,428	2,257,674			
うち遠征基金	900,000	900,000			
（合計）	3,157,428	3,157,674	（合計）	3,157,428	3,157,674

三菱ＵＦＪ　定期預金　3,157,374円

第2表　2022年度役員・幹事の選出

:新規

	2022年度		
			就任
会長	前神　直樹	1976	2021.6
副会長	兵藤　元史	1977	2021.6
相談役	中村　保	1958	2016.7
	竹中　彰	1964	2016.7
	小島　和人	1965	2021.6
総務幹事	加藤　博行	1976	2020.7
総務副幹事	岡部　寛史	1980	2021.6
会計幹事	中西　茂	1981	2018.7
会報幹事	岡田　健志	1967	2016.7
	藤本　敏行	1976	2017.7
山行幹事	金子　晴彦	1970	2012.6
（芦安）	井草　長雄	1973	2019.7
	兵藤　元史	1977	2020.7
	佐藤　周一	1979	2018.7
	齋藤　誠	1988	2019.7

	2022年度		
			就任
学生幹事	前神　直樹	1976	2011.6
	古田　茂	1995	2014.7
	山田　秀明	2003	2020.7
	内海　拓人	2018	2018.7
	大矢　和樹	2018	2018.7
HP幹事	加藤　博行	1976	2018.7
	金子　晴彦	1970	2008.6
図書幹事	中村　雅明	1968	2009.6
図書副幹事	井上　仁	2022	新任
監事	本間　浩	1965	2017.7
	佐藤　活朗	1978	2019.7

創部100周年記念誌編集委員

井草	長雄	1973
前神	直樹	1976
加藤	博行	1976
兵藤	元史	1977

退任　佐藤（久）山行幹事（2011年6月～2022年5月）

退任　佐藤（久）保険幹事（2011年6月～2022年7月）　（保険幹事業務の廃止による）

創部 100 周年記念事業に特別賛助金を!!

１．特別賛助金　；　１口 5,000 円（最低２口 10,000 円）

２．振　込　先　；　三菱ＵＦＪ銀行赤坂支店（店番６０９）

口 座 名：針葉樹会 100 周年記念

口座番号：普通０３４５６２９

３．備　　考　；　上記 100 周年記念口座は、年会費で使用しておりますロ座とは別口座となりますので、ご注意お願いいたします。

（会計幹事　中西　茂）

別表3

【針葉樹会2022年度　一般会計予算(案)】

(2022年6月1日～2023年5月31日)

2022/6/1

（単位:円）

支出			収入		
(項目)	予算	前期実績	(項目)	予算	前期実績
針葉樹会報発行費	450,000	302,709	前年度繰越	5,245,176	5,666,998
山岳部補助	150,000	100,440	納入会費	650,000	498,000
通信連絡費等	120,000	155,860	（普通会費）	(500,000)	(370,000)
慶弔費	12,000	8,800	（賛助会費）	(150,000)	(128,000)
日本山岳会費	14,000	14,000	会合余剰金	0	0
Home page年間維持経費	100,000	100,440	預金利子・利息	40	46
図書関係費用	40,000	42,350	寄付金	0	0
芦安登山道整備	50,000	0	会報販売代金	0	0
学生登山研修補助	60,000	17,009			
合同登山補助	20,000	0			
学生合宿補助	100,000	90,330			
大学体育会ＯＢ．ＯＧ　連絡経費	5,000	0			
創部100周年記念誌準備経費	0	87,930			
（支出小計）	1,121,000	919,868	(収入小計)	650,040	498,046
次年度繰越	4,774,216	5,245,176			
(合計)	5,895,216	6,165,044	(合計)	5,895,216	6,165,044

(収入)
・普通会費　：例年目標並み
・賛助会費　：例年目標並み

(支出)
・針葉樹会報　：3回発行予定（151/152/153号）
・山岳部補助　：装備費等増による増額
・通信連絡費等　：新卒学生歓迎会会食費等
・日本山岳会費　：2022年分（学生分）
・Home page年間維持経費　：前年実績並み
・図書関係費用　：部誌補修費、本棚、合本郵送費
・芦安登山道整備　：例年予算並み
・学生登山研修補助　：3名分
・合同登山補助　：交通費等補助
・学生合宿補助　：夏合宿関連支援（固定額）

【針葉樹会2022年度遭難対策基金予算（案）】

(2022年6月1日～2023年5月31日)

支出			収入		
項目	予算	前期実績		予算	前期実績
			前年度繰越	3,157,428	3,157,374
支出	0	0	うち遭難対策基金	2,257,428	2,257,374
			うち遠征基金	900,000	900,000
			利息等	63	54
（年度内実支出　小計）	0	0	（年度内実収入　小計）	63	54
次年度繰越	3,157,491	3,157,428			
うち遭難対策基金	2,257,491	2,257,428			
うち遠征基金	900000	900,000			
合計	3,157,491	3,157,428	合計	3,157,491	3,157,428

・預金金利　0.002%を想定

第4表　一橋大学一橋山岳部 2021年度一般会計決算 ㈰2021年6月1日 ㈮2022年5月31日

（単位：円）

収入の部・項目		予算	実績	増減額	備考
1 前年度繰越金		228,000	228,000	0	
2 針葉樹会補助金		314,000	221,000	▲ 93,000	
	1 R3年度山岳部補助金	100,000	100,000	0	
	2 日本山岳会費・同多摩支部会費	14,000	14,000	0	
	3 研修補助金（夏山・冬山研修）	60,000	0	▲ 60,000	夏山・冬山とも開催中止。
	4 研修補助金（講習会等）	0	17,000	17,000	モンベル主催「雪山登山技術実践講習会」。
	5 夏合宿交通費補助金	140,000	90,000	▲ 50,000	夏合宿は中止。正しくは夏季休暇中の個人山行に対する補助。
3 部費		91,000	74,000	▲ 17,000	
	1 一般部員	64,000	40,000	▲ 24,000	4,000円×10名。
	2 冬山・登攀・沢 所属部員	15,000	20,000	5,000	5,000円×4名。
	3 1年部員	12,000	14,000	2,000	2,000円×7名。
4 受取利子		1	1	0	
5 装備補助金 返金		0	35,000	35,000	所属部員の退部のため。
6 モンベル山岳保険料		185,000	102,000	▲ 83,000	「短期補償プラン」を選択する部員が増えたため。
7 新歓保証金		5,000	5,000	0	新歓委員会からの援助。
収入計		823,001	665,001	▲ 158,000	

支出の部・項目		予算	実績	増減額	備考
1 日本山岳会費・同多摩支部会費		14,000	14,000	0	
2 装備購入費		36,000	38,200	2,200	
	1 ハーネス	8,000	0	▲ 8,000	今年度も沢・登攀への新規参加者が不在だったため。
	2 カラビナ	5,000	0	▲ 5,000	
	3 細引き	1,000	0	▲ 1,000	
	4 スリング	6,000	0	▲ 6,000	
	5 ガス缶	6,000	0	▲ 6,000	来年度に調達する。
	6 スノーフライ	0	35,200	35,200	冬山用。
	7 救急セット備品・医薬品	10,000	0	▲ 10,000	
	8 修理費（テント用ポール）	0	3,000	3,000	傷んだショックコードを交換。
3 備品購入費		92,000	131,180	39,180	
	1 エアコン本体・設置費用	83,000	76,780	▲ 6,220	
	2 暖房器具	0	10,000	10,000	
	3 液晶ディスプレイ・各種ケーブル	0	44,400	44,400	部会・学生幹事会などWeb会議で使用。
	4 部室清掃用品	9,000	0	▲ 9,000	
4 事務費（コピー費・送金費）		2,000	1,280	▲ 720	
5 山岳書籍等購入品		10,000	1,100	▲ 8,900	
	1 山岳書籍購入費	7,000	0	▲ 7,000	
	2 地形図・登山用地図	3,000	1,100	▲ 1,900	
6 針葉樹会補助金		200,000	107,000	▲ 93,000	
	1 研修補助金（夏山・冬山研修）	60,000	0	▲ 60,000	
	2 研修補助金（講習会等）	0	17,000	17,000	
	3 夏合宿交通費補助金	140,000	90,000	▲ 50,000	
7 ヤマテン（山岳気象）会費		3,000	3,960	960	
8 通信費		53,000	57,864	4,864	部室でのWi-Fi利用費。¥4,820×12か月
9 共同装備修繕積立費		10,000	10,000	0	
10 新歓費		210,000	90,000	▲ 120,000	装備補助金。
11 モンベル山岳保険料		185,000	102,000	▲ 83,000	
12 次年度繰越金		8,001	108,417	100,416	
支出計		823,001	665,001	▲ 158,000	

第5表　一橋大学一橋山岳部 2022年度一般会計予算 ㈲2022年6月1日 ㈲2023年5月31日

（単位：円）

収入の部・項目		予算	前期実績	備考
1. 前年度繰越金		108,417	228,000	
2. 針葉樹会補助金		324,000	221,000	
	1. R4年度山岳部補助金	150,000	100,000	
	2. 日本山岳会費・同多摩支部会費	14,000	14,000	
	3. 研修補助金（夏山・冬山研修）	60,000	0	夏山・冬山研修 各30,000円を想定。
	4. 研修補助金（講習会等）	0	17,000	
	5. 夏合宿補助金	100,000	90,000	
3. 部費		102,000	74,000	
	1. 一般部員	56,000	40,000	¥4000×14名
	2. 雪山・登攀・沢 所属部員	20,000	20,000	¥5000×4名
	3. 1年部員	26,000	14,000	¥2000×13名
4. 受取利子		1	1	
5. 装備補助金 返金		0	35,000	
6. 新歓保証金		5,000	5,000	新歓委員会からの補助。
収入計		539,418	563,001	

支出の部・項目		予算	前期実績	備考
1. 日本山岳会費・同多摩支部会費		14,000	14,000	
2. 装備購入費		128,000	38,200	
	1. ザック	53,000	0	ザックを購入予定。￥26,500×2。
	2. 冬用アイゼン	30,000	0	雪渓訓練の為。￥10,000×3。
	3. スリング	7,000	0	雪渓訓練の為。￥1,400×5。
	4. 食器類	7,000	0	山中での調理の為。
	5. ザックカバー	8,000	0	￥4,000×2。
	6. ハーネス	6,000	0	
	7. 装備レンタル費	17,000	0	雪渓訓練の為。
	8. スノーフライ	0	35,200	
	9. 修理費（テント用ポール）	0	3,000	
3. 備品購入費		3,000	131,180	
	1. 扇風機	3,000	0	部室の環境改善の為。
	2. エアコン本体・設置費用	0	76,780	
	3. 暖房器具	0	10,000	
	4. 液晶ディスプレイ・各種ケーブル	0	44,400	
4. 事務費（コピー費・送金費）		2,000	1,280	
5. 山岳書籍等購入費		10,000	1,100	
	1. 山岳書籍	7,000	0	部会講習用の参考資料や天気図用紙等。
	2. 地形図・登山用地図	3,000	1,100	
6. 針葉樹会補助分		190,000	107,000	
	1. 夏山・冬山研修	60,000	0	夏山・冬山研修 ￥30,000×2。
	2. 講習会等	30,000	17,000	
	3. 夏合宿諸費用	100,000	90,000	
7. ヤマテン（山岳気象）会費		3,960	3,960	￥330×12か月。
8. 通信費		57,840	57,864	部室のWifi使用料。￥4,820×12か月。
9. 共同装備修繕積立費		10,000	10,000	共同装備の修繕のための積立金。
10. 新歓費		30,000	90,000	新歓山行代。
11. 次年度繰越金		90,618	108,417	
支出計		539,418	563,001	

2022年7月針葉樹会招集通知に寄せられた近況　　2022年7月22日

卒年	お名前	参加/オンライン	近　況　（メッセージがあった方のみ掲載しています）
1956	石和田四郎	不参加	100周年に向っての会長，幹事、その他関係者の皆様のご尽力に感謝します。「年齢相応に暮らして」おります。6月25日に「31年会全学年の逝去学友を偲ぶ会」を無事済ませました。佐薙、松尾、宮川、石和田の4名が出席、全学年として集まるのはこれが最後かと？察し、同伴者に支えられながら出席、という学友も多く見られました。何しろ561名のうち逝去者は332名、60%以上に及びます。無理もないですよね。90才という「峠」は可成り骨のおれるものなり、と感じております。100周年の北岳に「似て？」総会の盛会、議事万般の円滑な決議・承認、各位の益々のご健勝を祈り上げております。
1956	佐薙　恭	不参加	90の壁を登り始めました。年齢相応に元気です。針葉樹会の永続的発展を期待しています。
1956	松尾寛治	不参加	会報やメールで会員皆さんのご活躍を、楽しく拝見しています。小生７月で満90歳、この炎暑は堪えます。地下鉄の階段も膝腰に来ます。まるで登山道のように･･･。針葉樹会の発展と、諸兄の健康を祈ります。
1958	上原利夫	不参加	山歩きも難しい状況です。近くに遊歩道があり、時間があれば歩いています。夜の外出はやめています。
1958	加地幸雄	不参加	20年ほど前に石君に会った時、彼は山岳部は会員不足で潰れるに違いないと悲観していましたが、今となって山岳部員31名とは一大朗報です。僕はよく山へ行きます。6月20日現在、今年の山行日数は33日です。今のところ地元の山だけですが、来る9月10日から21日、フレンチアルプスのChamonix/Mont Blanc山群散策の計画です。
1959	市川陽一	不参加	年相応に脚力、体力、バランス感覚等衰えて来て居る上に、昨年10月にチョットした手術を受け、その後遺症が完全に癒えていないため、恒例としておりました比叡山中腹への水汲みも中断中です。総会の大大盛会をお祈りいたします。
1960	中西　巌	不参加	元気に毎日を送っています。春に、庭作りをしました。不要な木を取り除き、新しい木に植え替え、伊予の緑石を配置すると庭が甦りました。木々の成長と花の咲くのが楽しみです。
1960	丸子博之	不参加	針葉樹会総会ご案内感謝。体調不具合あり、残念ですが欠席します。慶祝一橋山岳部100周年。新入部員多数、心強し。現役部員、OB諸氏の益々の活躍を祈念致します。
1964	蛭川隆夫	不参加	今年1月末、脳出血を発症して療養中です。盛会を祈ります。
1964	竹中　彰	参加	最近は、同期の本間さんの脚の具合もイマイチ等から丹沢行も控えています。日本山岳会東京多摩支部の関係は、監事として毎月の幹事会に出席し、事業の進捗状況の説明などを聴取すると共に、登山教室プロジェクトチームのメンバーとして座学での「山の楽しみ方」などについてお話すること、実技山行でサポートとして初心者の皆さんに付き添い、少しでも自立した登山者の育成のお手伝いをするほか、同好会の「山の唄を歌う会」、「低山を楽しむ会」の山行にに参加していますが一昨年来のコロナ禍で活動もままならない中で、何とか山の空気、文化などに触れるように務めています。今秋の百周年事業北岳行には、是非好天の下で、久し振りの頂上を踏みたいものと楽しみにしています。
1965	本間　浩	不参加	「御神楽岳」　三井さんの越後シリーズ、最後に残った山ですので、麓までででも（山頂は無理です）行きたいと思っています。
1965	小島和人	参加	100周年の北岳登山に参加できるように腰痛退治に努力していきます。
1968	中村雅明	参加	2年間コロナ禍で山行もままならなかったので、今年こそと年初に4月中旬の野伏ケ岳、7月の北海道登山など予定しましたが、悪天候、メンバーの体調不良で取りやめた計画が多く、半年間では唯一、6月初めの針ノ木岳が見るべきものでした。この山行で弾みをつけ、夏山に向かうつもりでしたが、6月末の南会津荒海山からの下山時登山口近くの沢に降りるときに転倒し、左胸（肋骨）、下顎を強打しました。幸い出血はなく帰宅できました。打ち所が悪ければ、遭難騒ぎでした。ところが、3日目頃から痛み出して3週間経った今も胸の痛みが消えません。9月末の創部100周年記念北岳登山までには治るとおもいますが、夏山は自重します。
1969	藤原朋信	不参加	昨日猛暑の中、会津の荒海山に中村さんと登ってきました。半分熱中症状態で、下りに昨年、前神さんたちが採用した戸別沢ルートに迷い込み難儀しました。コースは、立入禁止の看板もなくて、戸別沢の入口には「荒海山登山口」の看板もあったので、昨年から正式ルートに認定されたのでしょうね？ （藤原会員からは、お便りとともに、学生が利用できるよう、信州川上村にお持ちの山荘「風林荘」の利用案内を送っていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。）
1977	兵藤元史	不参加	この1～2年、百周年記念写真誌の編集委員の1人として、写真収集、キャプション書き等で、リタイア後の時間をお蔭様で楽しく過ごせています。初稿用原稿を先月末に提出し、作業は一段落しました。どんな本ができるか楽しみでもあり、不安でもあります。この間の皆様のご協力に感謝します。
1984	稲毛尚之	不参加	都合がつかず欠席いたします。創立100周年の記念の年、総会のご盛会を祈念いたします。山行に備えてではないですが、週末は皇居周辺等でのウォーキングを楽しんでいます。
1985	石丸義男	不参加	31名も現役が居る、山岳部員が居る、凄いです。益々の繁栄を期待したいですね。100周年おめでとうございます。昨秋還暦となり、昨年末に無事、三井物産を定年退職し地元でやりたいこともこれあり（今年から射水市政策アドバイザー委嘱、2nd houseも購入し全面renovation実施、週末は、富山市から大体地元に帰っております）、引き続き、三井物産@北陸支社で（再雇用で）働いて居ります。やっていることも肩書も現役時代と全く変わりません。（給料だけが大幅減、笑）毎日、立山連峰を仰ぎながら、富山で悠々自適、（愚妻と一緒に）過ごして居ります。
1986	白石章治	オンライン	23日(土)午後6時からNHKBSPで「地球トラベラー　完登目指せ！幻の剱大滝」を放送します。22日(金)はその準備のため総会に出席できません。申し訳ございません。
1988	斎藤　誠	オンライン	ワンゲルだった中村君からの誘いで、7月10－11日　木曽駒、宝剣、空木縦走予定です。学生時代以来の中央アルプスでしょうか。
2018	曲　文琛	不参加	2月スキー練習中に骨折したため、現在リハビリに励んでおります。
2020	吉田和麿	不参加	今回の総会に参加することはできませんが、今後ともよろしくお願い致します。

学生の活動記録

日光白根山

猪股　ひかり（社４）

【日　程】２０２２年８月25日～26日

【参加者】猪股ひかり（ＣＬ、社４）、関響太郎（ＳＬ、法２）、塚本亮太（経２）、吉川昌希（社１）

まだまだ暑い時期に実施された本山行は夏休み中の夏合宿ではない活動ということになるが、私に加え３名の部員が参加してくれた。うち２名は今年度からの新入部員で、いずれも山は初心者である。彼らは後日、二泊三日での奥穂高山行に参加する予定であり、今回はそれを見据えた経験の蓄積（及び実力の把握）のための山行でもあった。更に個人的な事情を付け加えると、日光白根は１年次に挑戦したものの体調不良から登頂できずに嫌な記憶の残る山であったため、リベンジも兼ねたいところである。

８月25日朝、東武日光駅での集合。日光は東京からアクセスしやすく、そこまで早起きしなくても良いのがありがたい…と言いつつ、私自身は乗る予定だった電車を２分ほどのそれほど惜しくもない時間差で逃し、予定外の課金で特急を利用するという不甲斐ないスタートを切った。幸い集合時間には間に合い、優秀にも鈍行ですでに到着していた後輩３名と合流する。降り立った日光は曇り空で、東京とは比べ物にならないその涼しさに驚いた。

山行の目標は日光白根山ということになるが、ご存知の通りこれ自体は日帰りで攻略できる山である。したがってメインは登頂を目指す２日目で、１日目はアクセスがてら平地をのんびりハイキング、といった行程となっている。そういうわけで、まずは東武日光駅からバスを利用し竜頭の滝付近で降車、そこから宿泊地となる日光湯元キャンプ場を目指して歩きはじめた。

竜頭の滝は比較的緩い角度で流れている。滝はいつ現れるのだろう、と思っていたら横に既にある流れがそれなのであった。滝を通り過ぎ、よく舗装された散策路を歩いてゆく。息も切れないので話が弾む。新入生とは顔を合わせてゆっくり話をしたことがなかったため、今までどんな部活をやっていたのか、バイトは何をしているのか等、基本的なことだけでも聞きたいことがたくさんあった。

そんなこんなで楽しく歩いているとすぐに戦場ヶ原に差し掛かる。感動するといった類の景色ではないものの、まあ普通に綺麗である。多くの観光客が写真を撮るであろうポイントでとりあえず写真を撮ったりしてみる。と、いくらも進まないうちに木道の補修工事を行っているため通り抜けは不可であると伝える看板が現れた。ＹＡＭＡＰを確認してみると確かに通行不可の情報提供があり、気が付かなかったのは完全に下調べ不足であった。やむなく近くの分岐点まで引き返し、予定より少しばかり西のルートで迂回する。

好きなアイドルなどの話をしつつ、迂回したために戦場ヶ原と呼んでよいのかわからない原部分を通過すると、湯滝に到着する。想像以上の迫力である。観光客も多く、遠足であろうか、小学生の集団も現れた。行儀の良い彼ら彼女らは我々にもしっかり挨拶をして

2022.8.25　竜頭の滝　撮影：関響太郎

くれるが、長い列に永遠に挨拶を返し続けるのには少々体力が必要だったりする。もらった元気でプラマイゼロといったところだろうか。

小学生の列が途切れるのを待って湯滝を出発し、湯ノ湖を半周するとまもなく日光湯元キャンプ場に到着する。しっかりした広さのあるキャンプ場だが、宿泊者は他に数組ほどしかいない。テントを設営し、やることもなくトンボと戯れるなどした後、早めの夕食をとることにする。メニューは考えるのも作るのも楽で確実に美味しい我らの味方、鍋である。今回はキャンプ場のしっかりした炊事場を使えるため、いざとなれば汁が捨てられるため安心感がある（結局残らなかったが）。〆のうどんまでいただき、テントに戻った後は延々と大富豪を繰り広げて就寝する。

8月26日。朝方ちらっと雨が降ったが、パンとスープの朝食を終え撤収にとりかかるころには止んだ。今回は危険な天気にはならないもののどこかでは降られるだろうとの予想だったが、結局雨はこの一回だけで、フライ担当が少し悲しい気持ちになった程度ですんだのはありがたいことである。

新入生も多いなか皆てきぱきと動いてくれ、予定通り4時にキャンプ場を出発する。始めはスキー場を歩くことになるが、傾斜は緩くそれほど嫌な道ではない。むしろここは通常の登山道に入った途端かなりの急登が続き、難関である。実際に私は3年前ここで気持ちが折れたため、先頭を務めた今回はゆっくり歩くことを意識したものの、やはり登山に慣れない新入生には辛かったようだった。それでも荷物分担の提案には首を縦に振らず、しっかりと付いてきてくれる。私は始めのペースが下手だったか、と反省しつつ、自らの成長を感じたりもする。

急登ではあるものの特に危険箇所もなく、効率よく標高を上げて前白根山に到着。意外と見晴らせ、五色沼まで綺麗に見える。3年前は霧で何も見えなかったのに、と嬉しいのか悔しいのかわからない気持ちになる。このあたりで既に新入生の一人がかなりしんどそうな様子を見せていたが、筋肉の疲労が大きく他の体調は特に悪くないとのことだったため、危険性は低いと判断する。

休憩をとった後、少しばかり高度を下げると五色沼避難小屋が現れる。避難小屋にしては比較的綺麗な作りで、居心地は良さそうである。避難小屋を出発すると山頂までは標高差にして３００ｍ強、最後のひと踏ん張りとなる。上手く伝わっているかもわからないが歩き方のコツなどをつぶやきつつ、ゆっくりと歩を進めていく。

休憩を挟みつつ1時間半程で山頂に到着。道程は概ね緑に覆われていたが、山頂付近のみ岩場となり、私好みの様相である。このころには晴れと言って良い天気になっており、なんだ良い山じゃん、と前回の悔しさと天候の悪さからかなり低かった評価を１８０度覆す。まだ山にいくつも登っていない新入生が新鮮そうに眼を輝かせはしゃいでいる様も、

2022.8.26　五色沼（前白根から）　撮影：吉川昌希

2022.8.26　日光白根山頂上にて
左から 吉川昌希（1）、猪股ひかり（4）、関響太郎（2）、塚本亮太（2）

山好きとしてはかなり嬉しいものである。最上級生である自分も負けず劣らずはしゃぎながら写真を撮る。

十分に景色を堪能してから、菅沼方面へと下山を開始した。登りも急だが下りもなかなかである。いつも登っている最中には「ここまで行ったらあとは下るだけだから」と自分も他人も励ますくせに、下りだせば下りだしたで「下りのほうがきつい」と思うのだから学習しない。そして眺望も乏しく特に面白くない、目指すものももうない、というわけで「しりとり」が始まる。私は大人になっても「しりとり」をしているのなんて登山者くらいではないか、とくだらないことを思う。皆一橋大生のプライドがあるのか普通の単語は意地でも使わないため、必死で受験勉強の知識を呼び起こして小難しい単語を引っ張り出す。この作業のおかげで下りの体感はかなり短くなったような気がする。

下山も残り少なくなったあたりで、新入生の1人が水を飲み切ってしまった。幸い私が予備の水を持っていたため渡して事なきを得たが、水の重要性や量の目安を伝えられていなかったことは重大な反省点である。

なおも「しりとり」を続けながら最後は平坦な道を歩き、ようやく登山口に到着した。登山は終了、ということでバスを待ちながらふもとの茶屋で各自好きなものを飲み食いする。バスに乗って湯元まで戻り、乗り換えついでに温泉に入って疲れを癒す。再びバスを利用して東武日光駅へ向かい、解散となった。

今回の山行では自分以外後輩、しかも半数が初心者という状況のなか宿泊山行初のＣＬを務めることとなり、いささか不安に思いながら出発した。結果から言えば全員が無事に行程を終えることができ、山の楽しさも感じてくれたようなので上出来であろうか。一方で下調べやサポートの不足等、反省すべき点もあった。個人的には去年、一昨年とコロナ禍が続き満足に対面での活動ができないなかで、1年生から一飛びに4年生へとなってしまったようで、上級生としての経験も足りていないように感じている。あのときの4年生のように大きな背中を今自分は見せられているだろうか（反語）と思いつつも、最上級生としての立場を自覚し引退までのあとわずかな間、たくさん入ってくれた新入生にできるだけのことを伝えていこうと改めて決意した次第である。

第 6 表　2022 年 1 月～9 月　山行表

一橋大学山岳部

時期						コース	メンバー
年	月	日		月	日		
2022	1	14	～	1	15	稲子湯−本沢温泉−稲子湯	佐々木(CL、社研2)、岩崎(SL、法4)、猪股(社4)、淺香(経2)
	1	27	～	1	29	夜叉神峠−南御室小屋−薬師岳−観音岳−地蔵岳−夜叉神峠	佐々木（CL、社研2）、岩崎（SL、法4）、猪股（社4）
	5	7	～	5	8	鴨沢−七ツ石小屋−雲取山−鴨沢	岩崎（CL、法4）、半澤(SL、社4)、下西ノ園(経2)、櫻井(法2)、重岡(社2)、塚本(経2)、中林(法1)、小松(経1)、亀井(経1)
	6	3	～	6	4	扇沢−大沢小屋−針ノ木岳−扇沢(針ノ木雪渓訓練)	岩崎(CL、法4)、山下(SL、商4)、半澤(社4)、奥野(法4)、関(法2)、重岡(社2)、吉川(社1)、亀井(経1)、小松(経1)、黒川(法1)、高(社1)、清水(社1)、田村(社1)、中林(法1)、前田(法1)
	6	18	～	6	19	尾瀬	淺香(CL、経2)、関(SL、法2)、重岡(社2)、高(社1)、清水(社1)、田村(社1)
	6	25	～	6	26	美濃戸口−行者小屋−赤岳−横岳−硫黄岳−赤岳鉱泉−美濃戸口	佐々木(CL/装備、社研2)、半澤(SL、社4)、吉川(社1)、黒川(法1)
	7	2				蓼科山	淵田(CL、社2)、荷月(SL、社2)
	7	9	～	7	10	西沢渓谷入口−雁坂峠−雁坂小屋−甲武信ヶ岳−西沢渓谷入口	淺香(CL、経2)、田村(SL、社1)、清水(社1)
	7	23	～	7	24	駒ヶ根−空木岳−木曽駒ケ岳−ロープウェイで下山	佐々木(CL、社研 2)、岩崎(Sl、法4)、半澤(社4)、小松(経1)
	8	25	～	8	26	戦場ヶ原−湯本キャンプ場−日光白根山−菅沼	猪股(CL、社4)、関(SL、法2)、塚本(経2)、吉川(社1)
	9	3	～	9	5	羅臼岳、雌阿寒岳	下西ノ園(CL、経2)、淵田(SL、社2)
	9	4				御岳山−鍋割山−大岳山−奥多摩駅	半澤(CL、社4)、重岡(SL、社2)、高(社1)
	9	5				象潟登山口−鳥海山−象潟登山口	猪股(CL、社4)、神田(SL、経4)、岩崎(法4)
	9	9	～	9	11	上高地−涸沢野営場−奥穂高岳−涸沢野営場−上高地	山下(CL、商4)、半澤(SL、社4)、塚本(経2)、黒川(法1)、清水(社1)、田村(社1)、吉川(社1)

一橋大学山岳部　新入部員紹介

2022 年 8 月末現在

氏名	入学年	学年	学部	出身高校	出身県
荷月秀駿	2021	2	社	桐朋高校	東京
重岡諒	2021	2	社	都立西	東京
塚本亮太	2021	2	経	城北	東京
亀井奏良	2022	1	経	鶴岡南	山形
高漢決	2022	1	社	韓国	韓国
小松大空	2022	1	経	県立船橋	千葉
清水慧介	2022	1	社	藤島	福井
田村健	2022	1	社	県立船橋	千葉
中林茉厘	2022	1	法	広尾学園	東京
黒川輝	2022	1	法	横浜翠嵐	神奈川
前田泰知	2022	1	法	千葉東高校	千葉
吉川昌希	2022	1	社	浅野	大阪

編集後記

丹沢でもトレイルランニング（トレラン）を楽しむ人が大勢いる。下りで後ろに付かれると、ランナーが転んだらこちらも吹っ飛ばされてしまうのでは？という恐怖感を覚える。

ランナーも礼儀正しく、近づくと数ｍの間隔をとってスピードを落とすし声掛けもしてくれるので、心配は不要なのだけれど。ランナーも登山者もマナーを守って事故のないように楽しみたいもの。

創部百周年記念の「一橋山岳部百年」（写真誌）が印刷に回されるタイミングにはいった。編集に携わった前神会長以下の委員の方々におかれては、本当にご苦労様でした。完成・発行が待ち遠しいです。

個人的ですが、学生の４年間、卒業して55年、針葉樹会との関係が濃いとき薄いときがありましたが、１００年のうち60年近くも関係してきたと思うと感無量です。細々とではありますが、山登りを継続してきたおかげです。

現実にもどりますが、「一橋山岳部百年」（写真誌）の発行費にあてるために、会員全員に「特別賛助金」（１口５，０００円、２口以上）のご協力をお願いしております。どうぞよろしくお願いいたします。なお、「特別賛助金」の振込先は31ページをご覧ください。

会報の発行をお願いしているヤマノ印刷から、たってのお願いということで、発行費用の値上げ要請を受け、値上げ幅を半分ほどに抑えてもらって了解しました。

みなさんから受け取った原稿や写真を多少の整理をしますが、殆どそのままヤマノ印刷へ送り、編集作業を殆どやってもらっている状況では致し方がないという実情です。

（岡田　健志）

■会費納入のお願い

２０２２年度（22年６月～23年５月）の会費納入をお願いいたします。

会費（**普通会費**）は卒業年次に関係なく、一律５０００円です。（ただし、卒業後60年以上経過した会員については会費免除となります）。

また、普通会費のほかに、期間を問わず**賛助会費**を募集しております。**賛助会費**は一口１０００円で、口数は任意です。

近年、学生部員の増加に伴い山岳部への支援強化の必要性が高まっておりますので、その資金手当てのためにも、**賛助会費**へのご協力をお願い申し上げます。

◎会費納入先◎
三菱ＵＦＪ銀行　赤坂支店
口座名　針葉樹会
口座番号　普通４８２５６４７

＊振込の際、適用欄にお名前と卒年次をご記入ください。

会計幹事　中西　茂